

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

令和 4 年度

令 和 5 年 8 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	1
2	位置	1
3	土壌	1
4	土地面積および利用区分	1
5	機構	2
6	職員	2
7	建物	4
8	新たに設置した主要施設および備品	5
9	決算	6

II 作況

1	気象経過	7
2	当場の作況	10

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	22
1)	麦類に関する試験	22
2)	畑作物に関する試験	22
3)	ばれいしょに関する試験	22
4)	牧草・飼料作物に関する試験	23
5)	栽培環境に関する試験	23
6)	病害虫に関する試験	24
7)	地域支援活動	24
2	技術普及室の活動	24

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表	
1)	研究論文	28
2)	口頭発表	28
3)	専門雑誌記事	29
4)	著編書・資料	29
5)	新聞記事	29
2	普及事項	
1)	普及奨励事項	30
2)	普及推進事項	30
3)	指導参考事項	30
4)	研究参考事項	30
3	品種登録・特許申請	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1	諸会議	-----	31
2	各種委員会	-----	31
3	刊行印刷物	-----	34
4	広報活動	-----	34
5	見学受入れ	-----	34

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	-----	35
2	講師派遣	-----	35
3	職員研修	-----	36
4	職場研修	-----	37
5	国際交流	-----	37

VII その他

1	技術体系化チーム	-----	38
2	オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	38
3	表彰・受賞	-----	38
4	行事	-----	39
5	自己点検への対応	-----	40
6	建物配置図	-----	41
7	圃場配置図	-----	42

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スミズブロングラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害予察科を病虫科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅停留所から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

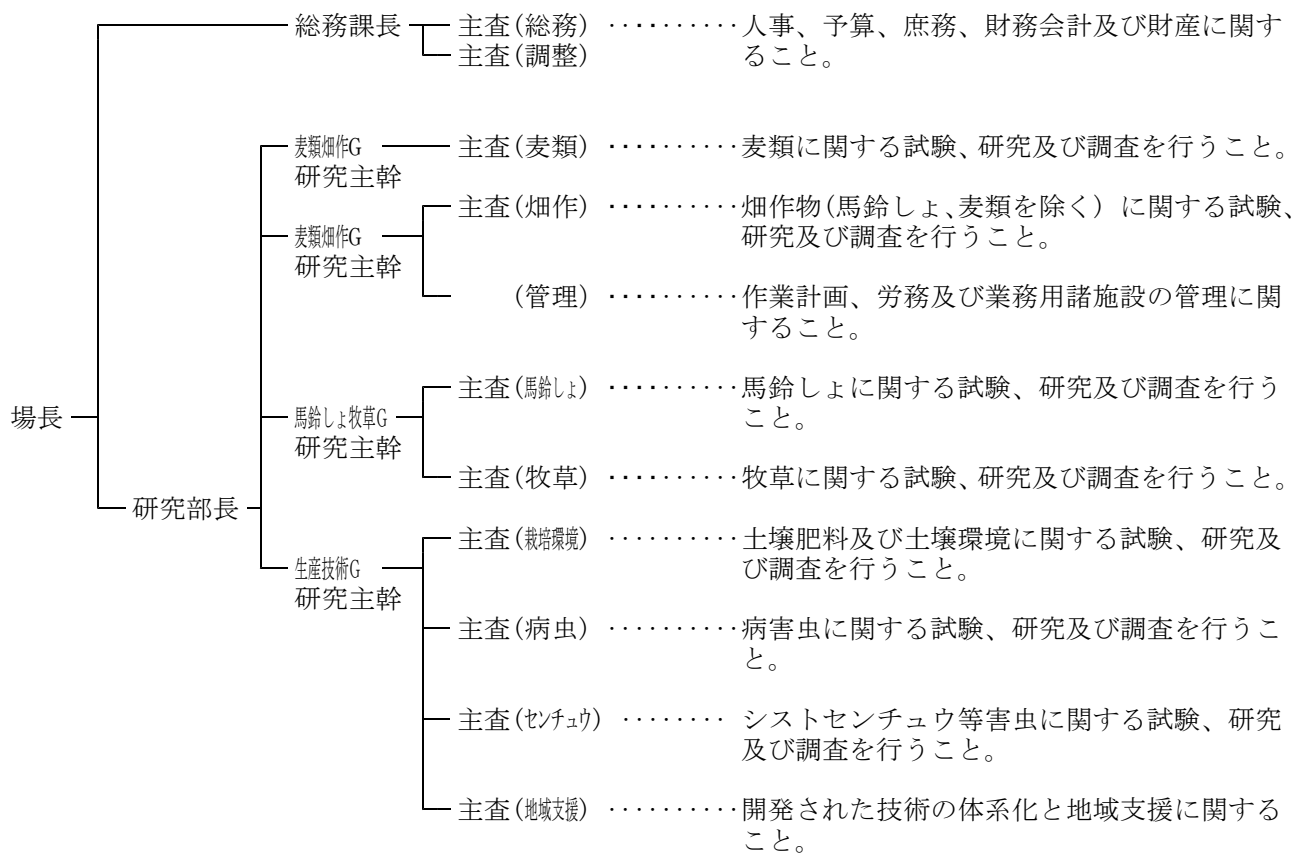
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁 舎 、 建 物 敷 地	118,564
公 宅 用 地	44,151 (道財産)
道 路 、 用 排 水 路	42,383
山 林	300,400
試 験 ほ 場 (畑)	709,705
〃 (隔離ほ場)	73,260
原 野 、 そ の 他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)

上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(普及指導) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

令和5年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 畑 作 G			馬鈴しょ牧草G		生 産 技 術 G			総務課	合 計	技 術 普及室
				麦 類	畑 作	管 理	馬鈴しょ	牧 草	栽 環	病 虫	支 援			
研究職	1	1	4	6	2		4	3	4	4	1		30	
行政職						4						5	9	3
計	1	1	4	6	2	4	4	3	4	4	1	5	39	3

(2) 令和5年3月31日現在員

職 名	身 分	氏 名	職 名	身 分	氏 名
場 長	法人職員	梶 山 努	(馬鈴しょ牧草G)		
総 務 課 長	北海道職員	森 光 治	研 究 主 幹	法人職員	宗 形 信 也
主 査 (総 務)	"	藤 田 賢 司	主 査 (馬鈴しょ)	"	藤 田 涼 平
主 査 (調 整)	"	松 島 明 司	研 究 主 任	"	品 田 利 博
技 師	"	門 なつみ	研 究 職 員	"	足 和 崎 奈 文
技 師	"	大 黒 剣 太	主 査 (牧 草)	"	和 飯 田 俊 憲
			研 究 主 任 員	"	高 利 和 紀
			研 究 職 員	"	高 利 史
< 研 究 部 >					
研 究 部 長	法人職員	岩 崎 暁 生	(生産技術G)	法人職員	柳 田 大 介
(麦類畑作G)			研 究 主 幹	"	酒 井 大 治
研 究 主 幹	法人職員	荒 木 和 哉	主 査 (栽培環境)	"	木 場 稔 信
研 究 主 幹	"	鈴 木 剛	研 究 主 査	"	桑 原 萌
主 査 (麦 類)	"	大 西 志 全	研 究 主 任	"	三 和 優 吾
研 究 主 査	"	木 内 均	研 究 職 員	"	小 倉 玲 奈
研 究 主 任	"	其 田 達 也	主 査 (病 虫)	"	小 野 寺 鶴 将
"	"	林 和 希	主 査 (センチュウ)	"	佐 々 木 太 陽
研 究 職 員	"	佐 藤 優 美	研 究 職 員	"	池 谷 美 奈 子
"	"	斉 藤 涼 介	専 門 研 究 員	"	田 中 一 生
主 査 (畑 作)	"	池 谷 暁 子	主 査 (地域支援)	"	
研 究 主 任	"	伊 藤 幸 雄			
専 門 主 任	"	中 出 秀 信	(道技術普及室)	北海道職員	上 堀 孝 之
主 任 師	"	横 川 愁 斗	上 席 普 及 指 導 員	"	添 島 均
"	"	柴 田 匠	主 任 普 及 指 導 員	"	小 山 拓 也
	"		主 査 (普及指導)	"	

(3) 転入者および採用者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研 究 主 幹	宗 形 信 也	4. 4. 1	上川農業試験場から
技 師	大 黒 剣 太	4. 4. 1	上川総合振興局より
研 究 職 員	斉 藤 涼 介	4. 4. 1	新規採用
研 究 職 員	三 和 優 吾	4. 4. 1	新規採用
技 師	柴 田 匠	4. 4. 1	新規採用

(4) 転出者および退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
総 務 課 長	森 光 治	5. 3. 31	上川農業試験場へ
主 査 (調整)	松 島 英 明	5. 3. 31	オホーツク総合振興局へ
研 究 主 幹	荒 木 和 哉	5. 3. 31	退職
研 究 主 幹	鈴 木 剛	5. 3. 31	十勝農業試験場へ
研 究 主 幹	柳 田 大 介	5. 3. 31	退職
主 査 (馬鈴しょ)	藤 田 涼 平	5. 3. 31	上川農業試験場へ
主 査 (栽培環境)	酒 井 治	5. 3. 31	十勝農業試験場へ
主 査 (センチュウ)	小 野 寺 鶴 将	5. 3. 31	花・野菜技術センターへ
専門研究員	池 谷 美 奈 子	5. 3. 31	再任用終了
上 席 普 及 指 導 員	上 堀 孝 之	5. 3. 31	網走農業改良普及センターへ
主 査	小 山 拓 也	5. 3. 31	網走農業改良普及センター清里支所へ

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(㎡)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	現契約職員詰所
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫（馬鈴しょ）	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施設

該当なし

(2) 備品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
セーフティライトカーテン	キーエンス LAK350	660,000	麦類畑作G
ウェザーパケット	ウェザーパケット TA-WL-2SG	795,850	生産技術G
全自動灰分測定システム	Precisa prepASH229	13,282,500	麦類畑作G
ストローチョッパー	ニプロ MEC2900RV	1,375,000	麦類畑作G
穀物水分計	フォスジャパン GAC2500C	968,000	麦類畑作G
バイオインキュベーター	日本医科器械製作所 LH-80WLED-6CT	177,500	生産技術G
生物顕微鏡	オリンパス BX53-33DICT	108,240	生産技術G
小型高圧蒸気滅菌器	アルプ KTR-3065A	436,700	馬鈴しょ牧草G
据置型アルコールチェッカー	サンコーテクノ ST-3000	347,600	麦類畑作G
電子天秤用イオナイザー	島津製作所 ATABLO-AP	101,200	麦類畑作G
電子天秤	A&D GP-40K	277,200	生産技術G
電気伝導率計	東亜DKK CM-41X	198,000	生産技術G
オートスチル	ヤマト WA511	1,186,350	馬鈴しょ牧草G
オートスチル	ヤマト WG511	1,244,100	生産技術G
パソコン	HP 6E1T6PA#ABJ	176,000	麦類畑作G
卓上マイクロ冷却遠心器	久保田製作所 Model 3520	415,800	生産技術G
デガー	ニプロ P-555D	148,500	馬鈴しょ牧草G
合 計		21,898,540	

9 決 算（支出額）

（単位：円）

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	0	0	0	
重 点 研 究 費	2,597,461	2,597,461	0	
職 員 研 究 奨 励 費	1,833,000	1,833,000	0	
経 常 研 究 費	20,531,000	19,721,403	809,597	
依 頼 試 験 費	0	0	0	
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	
技 術 普 及 指 導 費	235,100	235,100	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	1,375,000	1,375,000	0	
維持管理経費（研究）	725,000	725,000	0	
研究用備品整備費（積立金）	0	0	0	
維持管理経費（一般）	28,043,000	27,324,656	718,344	
研究関連維持管理経費	1,096,000	1,096,000	0	
知 的 財 産 経 費	0	0	0	
運 営 経 費	37,940,000	36,967,953	972,047	
共 同 研 究 費	8,000,000	8,000,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	2,180,000	2,180,000	0	
道 受 託 研 究 費	4,365,000	4,363,532	1,468	
そ の 他 受 託 研 究 費	56,019,000	56,008,421	10,579	
そ の 他 補 助 金	35,467,000	35,466,600	400	
維持管理経費（目的積立金）	3,618,000	3,618,000	0	
施設整備費補助金	0	0	0	
施設整備費（繰越積立金）	0	0	0	
科学研究費補助金	904,000	904,000	0	
合 計	204,928,561	202,416,126	2,512,435	

※ 人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費）を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年より高く、中旬がやや高く、下旬が高かった。月平均気温は6.6℃で平年より高かった(+1.8℃)。降水量は上旬、中旬、下旬とも少なく、月合計は9.5mmで平年より少なかった(-42.0mm)。日照時間は上旬・下旬がやや多く、中旬が平年並であった。月合計は221.8時間で平年並であった(+30.0時間)。

5月：平均気温は上旬、下旬が平年並で、中旬が極めて高かった。月平均気温は12.7℃で平年よりやや高かった(+1.3℃)。降水量は上旬がやや多く、中旬が少なく、下旬が多かった。月合計は61.0mmで平年並であった(+3.0mm)。日照時間は上旬・中旬がやや多く、下旬がやや少なかった。月合計は198.1時間で平年並であった(+16.8時間)。

6月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬がやや高く、下旬が高かった。月平均気温は14.3℃で平年よりやや低かった(-0.7℃)。降水量は上旬が少なく、中旬が平年並、下旬が多かった。月合計は83.0mmで平年並であった(+3.0mm)。日照時間は上旬が少なく、中旬が平年並、下旬がやや少なかった。月合計は112.8時間でやや少なかった(-54.7時間)。

7月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬が平年並、下旬が低かった。月平均気温は20.3℃で平年並であった(+0.5℃)。降水量は上旬がやや多く、中旬が極めて多く、下旬が多かった。月合計は213.0mmで平年より極めて多かった(+133.3mm)。日照時間は上旬がやや多く、中旬がやや少なく、下旬が少なかった。月合計は148.6時間で平年並であった(-32.2時間)。

8月：平均気温は上旬が平年並で、中旬・下旬とも平年よりやや高かった。月平均気温は20.0℃で平年並であった(+0.4℃)。降水量は上旬が平年並、中旬が極めて多く、下旬がやや少なかった。月合計は216.0mmで平年よりやや多かった(+54.7mm)。日照時間は上旬・中旬・下旬とも平年並であった。月合計は137.9時間で平年並であった(+1.7時間)。

9月：平均気温は上旬・中旬・下旬ともやや高かった。月平均気温は16.7℃で平年よりやや高かった(+0.8℃)。降水量は上旬が少なく、中旬が多く、下旬が平年並であった。月合計は96.5mmで平年並であった(-6.4mm)。日照時間は上旬が多く、中旬が平年並、下旬がやや多かった。月合計は186.5時間で平年並であった(+29.6時間)。

10月：平均気温は上旬が平年並、中旬が平年より高く、下旬がやや高かった。月平均気温は9.2℃で平年よりやや高かった(+0.7℃)。降水量は上旬が多く、中旬が少なく、下旬が平年並であった。月合計は82.0mmで平年並であった(-1.8mm)。日照時間は上旬・中旬・下旬とも平年並であった。月合計は159.0時間で平年並であった(-6.1時間)。

11月：平均気温は上旬が平年並、中旬が平年よりやや高かった。中旬までの平均気温は3.6℃で平年並であった(+0.4℃)。降水量は上旬・中旬とも平年より少なかった。中旬までの合計は8.5mmで平年より少なかった(-42.0mm)。日照時間は上旬が平年より多く、中旬が平年並であった。中旬までの合計は104.7時間で平年よりやや多かった(+19.3時間)。

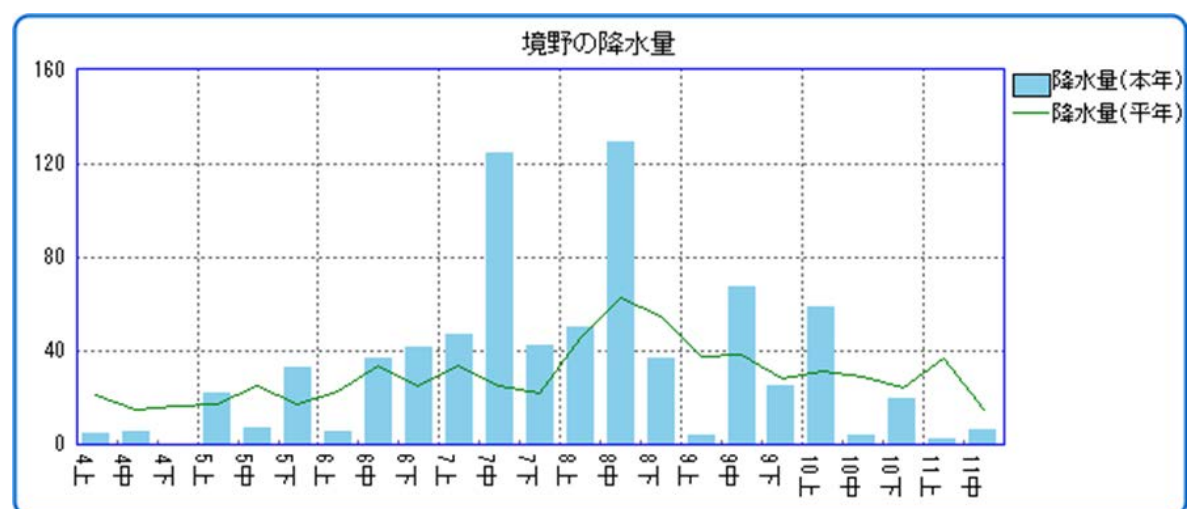
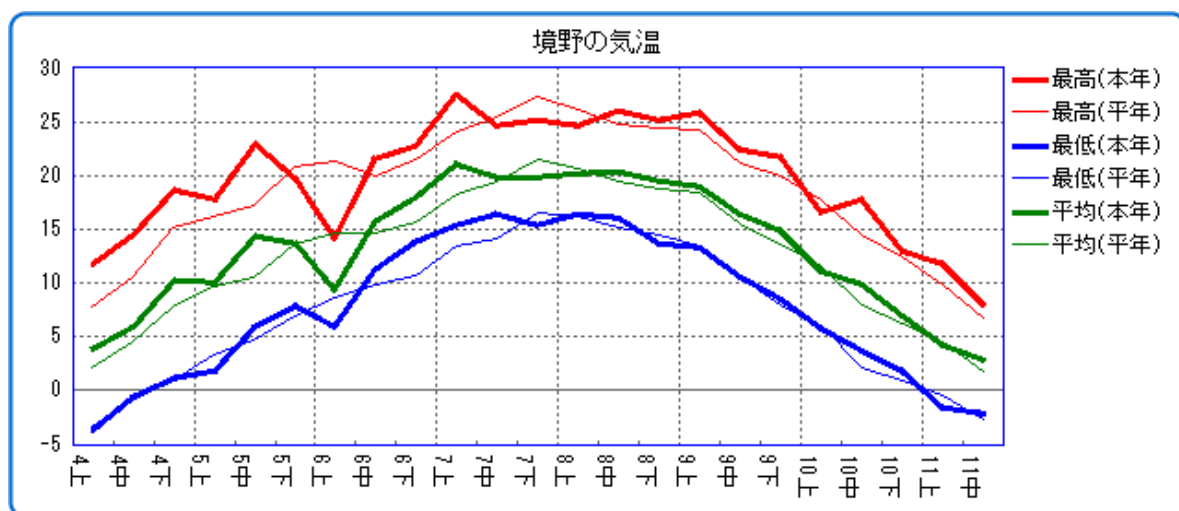
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月はやや高く、6月はやや低く、7月・8月は平年並、9月はやや高かった。この期間の日平均気温の積算値は2443.4℃であった(平年差+3.9℃、平年比100%)。

降水量：5月、6月は平年並、7月は極めて多く、8月はやや多く、9月は平年並であった。この期間の降水量の積算は449.5mmであった(平年差-41.5mm、平年比92%)。

日照時間：5月は平年並、6月はやや少なく、7月・8月・9月は平年並であった。この期間の日照時間の積算値は747.5時間であった(平年差-4時間、平年比99%)。

2) 気温、降水量及び日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
2022年	上旬	3.8	2.1	1.7	11.7	7.7	4.0	-3.7	-3.3	-0.4	4.5	20.9	-16.4	79.4	61.8	17.6
4月	中旬	5.9	4.6	1.3	14.5	10.6	3.9	-0.5	-1.0	0.5	5.0	14.8	-9.8	56.9	62.1	-5.2
	下旬	10.2	7.8	2.4	18.6	15.2	3.4	1.1	0.9	0.2	0.0	15.9	-15.9	85.5	67.9	17.6
	上旬	10.0	9.7	0.3	17.8	16.2	1.6	1.9	3.4	-1.5	21.5	17.1	4.4	70.3	51.2	19.1
5月	中旬	14.4	10.6	3.8	22.9	17.2	5.7	5.9	4.7	1.2	6.5	24.4	-17.9	76.1	59.4	16.7
	下旬	13.6	13.6	0.0	19.6	20.8	-1.2	7.9	7.0	0.9	33.0	16.5	16.5	51.7	70.8	-19.1
	上旬	9.4	14.6	-5.2	14.2	21.3	-7.1	5.9	8.6	-2.7	5.5	22.1	-16.6	35.4	63.1	-27.7
6月	中旬	15.7	14.6	1.1	21.5	20.0	1.5	11.3	9.9	1.4	36.5	33.4	3.1	43.3	51.4	-8.1
	下旬	17.9	15.7	2.2	22.8	21.5	1.3	13.9	10.7	3.2	41.0	24.6	16.4	34.1	53.0	-18.9
	上旬	21.1	18.3	2.8	27.6	24.0	3.6	15.4	13.4	2.0	46.5	33.3	13.2	66.0	50.2	15.8
7月	中旬	19.9	19.4	0.5	24.6	25.4	-0.8	16.4	14.2	2.2	124.5	24.7	99.8	43.6	60.3	-16.7
	下旬	19.9	21.5	-1.6	25.2	27.4	-2.2	15.3	16.5	-1.2	42.0	21.7	20.3	39.0	70.3	-31.3
	上旬	20.2	20.7	-0.5	24.6	26.2	-1.6	16.4	16.2	0.2	50.0	44.8	5.2	41.3	48.9	-7.6
8月	中旬	20.3	19.4	0.9	26.0	24.7	1.3	16.1	15.2	0.9	129.5	62.2	67.3	41.1	38.7	2.4
	下旬	19.5	18.8	0.7	25.1	24.4	0.7	13.7	14.4	-0.7	36.5	54.3	-17.8	55.5	48.5	7.0
	上旬	19.0	18.4	0.6	25.9	24.3	1.6	13.3	13.5	-0.2	4.0	37.0	-33.0	75.4	51.8	23.6
9月	中旬	16.4	15.5	0.9	22.4	21.2	1.2	10.5	10.5	0.0	67.5	38.1	29.4	44.1	50.3	-6.2
	下旬	14.8	13.6	1.2	21.8	19.9	1.9	8.5	8.0	0.5	25.0	27.8	-2.8	67.0	54.7	12.3
	上旬	11.1	11.6	-0.5	16.5	17.7	-1.2	5.8	6.0	-0.2	59.0	31.2	27.8	44.3	54.2	-9.9
10月	中旬	9.8	8.0	1.8	17.7	14.4	3.3	3.7	2.2	1.5	3.5	28.6	-25.1	65.4	54.5	10.9
	下旬	6.9	6.3	0.6	13.0	12.4	0.6	1.8	0.9	0.9	19.5	24.1	-4.6	49.3	56.4	-7.1
	上旬	4.3	4.6	-0.3	11.7	9.9	1.8	-1.6	-0.4	-1.2	2.5	36.2	-33.7	63.2	41.0	22.2
11月	中旬	2.8	1.8	1.0	8.0	6.8	1.2	-2.1	-2.6	0.5	6.0	14.3	-8.3	41.5	44.4	-2.9
	平均値(合計値)	13.3	12.7	0.6	19.7	18.7	1.0	7.7	7.3	0.4	769.5	668.0	101.5	1269.4	1264.9	4.5
		平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
	4月	6.6	4.8	1.8	14.9	11.2	3.7	-1.1	-1.2	0.1	9.5	51.5	-42.0	221.8	191.8	30.0
	5月	12.7	11.4	1.3	20.1	18.1	2.0	5.3	5.1	0.2	61.0	58.0	3.0	198.1	181.3	16.8
	6月	14.3	15.0	-0.7	19.5	20.9	-1.4	10.3	9.7	0.6	83.0	80.0	3.0	112.8	167.5	-54.7
	7月	20.3	19.8	0.5	25.8	25.7	0.1	15.7	14.8	0.9	213.0	79.7	133.3	148.6	180.8	-32.2
	8月	20.0	19.6	0.4	25.2	25.1	0.1	15.3	15.2	0.1	216.0	161.3	54.7	137.9	136.2	1.7
	9月	16.7	15.9	0.8	23.4	21.8	1.6	10.8	10.7	0.1	96.5	102.9	-6.4	186.5	156.9	29.6
	10月	9.2	8.5	0.7	15.6	14.7	0.9	3.7	3.0	0.7	82.0	83.8	-1.8	159.0	165.1	-6.1
	11月(中旬まで)	3.6	3.2	0.4	9.9	8.4	1.5	-1.8	-1.5	-0.3	8.5	50.5	-42.0	104.7	85.4	19.3

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。

10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	通常の根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	2021.10.17	2021.12.18	2022.04.06	110	2022.05.04	2022.04.18	2022.05.09	2022.10.07	150	2022.11.14
平年	10.13	12.07	04.08	124	04.27	04.23	05.08	10.15	159	11.04
比較	4	11	-2	-14	7	-5	1	-8	-9	10

期間	項目	平均気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
	5月上旬 ～ 9月下旬	本年 2443.4	449.5	747.5
		10年平均 2439.5	491.0	751.5
		比較 3.9	-41.5	-4.0

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。

平年値は前10か年の平均値である。

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦（令和3年9月播種）

作 況：不良

事 由：播種期は平年より7日早い9月16日であった。出芽期は平年より7日早い9月23日であった。播種が早く、出芽期以降の平均気温が平年並から高く経過したため、越冬前の草丈、茎数は平年を上回った。根雪始は平年より11日遅い12月18日、根雪終は平年より2日早い4月6日で、積雪期間は平年より14日短かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期が根雪の観測地点より10日早い3月27日で、雪腐病の発生は僅かに認められた。

コムギ縞萎縮病が発生し、萎縮症状が認められた。出穂期は平年より1日早い6月7日であった。登熟期間は降水量が多い傾向で推

移したものの、気温は6月下旬は高く、7月上旬は極めて高く推移したため、成熟期は平年より2日早い7月23日で、登熟期間は平年より1日短かった。稈長は平年並であった。コムギ縞萎縮病により生育が抑えられたこと、穂長、穂数が平年をやや下回ったこと、7月上旬を除いた登熟期間の日照時間がやや少なかったことにより、子実重は平年比63%であった。リットル重は平年をやや上回り、千粒重は平年を下回った。検査等級は1等であった。

これらのことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		きたほなみ		
		本年	平年	比較
播種期	(令和3年月.日)	9.16	9.23	△ 7
出芽期	(令和3年月.日)	9.23	9.30	△ 7
出穂期	(令和4年月.日)	6.07	6.08	△ 1
成熟期	(令和4年月.日)	7.23	7.25	△ 2
草丈 (cm)	(令和3年11月20日)	19.6	14.1	5.5
	(令和4年5月20日)	33.3	37.3	△ 4.0
	(令和4年6月20日)	82.5	86.9	△ 4.4
茎数(本/㎡)	(令和3年11月20日)	1316	960	356
	(令和4年5月20日)	1364	1254	110
	(令和4年6月20日)	800	740	60
成熟期	稈長 (cm)	79	79	0
	穂長 (cm)	7.6	8.3	△ 0.7
	穂数 (本/㎡)	646	688	△ 42
子実重(kg/10a)		489	779	△ 290
同上平年比 (%)		63	100	△ 37
リットル重 (g)		808	801	7
千粒重 (g)		38.6	40.8	△ 2.2
品質 (検査等級)		1	1	-

注) 平年値は前7か年中、平成27年（最豊）、30年（最凶）を除く5か年の平均値。

2) 秋まき小麦（令和4年9月播種）

作 況：やや良

事 由： 播種期は平年より7日早い9月16日であった。出芽期は平年より8日早い9月22日であった。播種が早く、出芽期以降、平均気温が平年より高い傾向で経過したため、

越冬前の草丈、茎数は平年を上回った。

以上のことから、目下の作況は「やや良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (令和4年月.日)	9.16	9.23	△ 7
出芽期 (令和4年月.日)	9.22	9.30	△ 8
草丈(cm) (令和4年11月20日)	19.7	13.5	6.2
茎数(本/㎡) (令和4年11月20日)	1643	853	790

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、令和2年(最凶)を除く5か年の平均値。

3) 春まき小麦

作 況：不良

事 由：調査圃場は融雪剤散布により3月26日に融雪期となった。3月下旬から4月上旬の気温は高く、降水量は少なかったため、圃場の乾燥が進み、播種期は平年より5日早い4月11日となった。播種後の4月中下旬の気温は高く、出芽期は5日から6日早かった。出穂期は平年より1～3日早かった。稈長、穂長、穂数は平年並であった。7月18日の激しい降雨によって倒伏が発生した。成熟期は平年より6日早く、登熟期間は平年より3～5日短かった。さらに登熟期間の日照時間は

少なかった。倒伏が多発生であった「春よ恋」は、千粒重が著しく低下し子実重は平年比82%であった。倒伏が微発生した「はるきらり」は、千粒重はやや軽かったが、子実重は平年比107%であった。両品種の子実重の平均値は、平年比94%であった。リットル重は両品種とも平年をやや下回った。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		春よ恋			はるきらり		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	4.11	4.16	△ 5	4.11	4.16	△ 5
出芽期	(月.日)	4.24	4.29	△ 5	4.25	5.1	△ 6
出穂期	(月.日)	6.19	6.20	△ 1	6.16	6.19	△ 3
成熟期	(月.日)	7.31	8.6	△ 6	8.3	8.9	△ 6
草丈(cm)	(5月20日)	26.1	19.5	6.6	28.9	20.5	8.4
	(6月20日)	76.2	69.8	6.4	77.6	69.7	7.9
茎数(本/㎡)	(5月20日)	986	607	379	965	581	384
	(6月20日)	792	820	△ 28	754	799	△ 45
稈長(cm)	(7月20日)	93	95	△ 2	93	90	3
穂長(cm)	(7月20日)	8.4	8.3	0.1	7.6	7.7	△ 0.1
穂数(本/㎡)	(7月20日)	718	707	11	712	702	10
子実重(kg/10a)		444	541	△ 97	552	518	35
同上平年比 (%)		82	100	△ 18	107	100	7
リットル重 (g)		767	791	△ 25	768	787	△ 19
千粒重 (g)		34.9	39.1	△ 4.2	38.5	39.9	△ 1.4
品質 (検査等級)		1	1	-	1	1	-

注) 平年値は前7か年中、27年(最豊)、平成29年(最凶)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし（サイレージ用）

作 況：平年並

事 由：播種期は平年より1日遅い5月17日、出芽期は平年より14日遅い6月13日であった。播種期前後の乾燥や低温により発芽が遅れ、7月中旬から8月上旬にかけての低温、多雨および寡照により徒長傾向で生育し、雄穂開花期は平年より9日遅く、絹糸抽出期は7日遅かった。8月中旬以降の気温は平年よりやや高く推移したことで、登熟は平年並に進んだ。収穫期は平年より2日遅い9月28日であ

り、収穫時の熟度は黄熟初期で平年並、稈長は平年より23cm高かった。総体の乾物率は平年より4.6ポイント低かった。乾物茎葉重が平年より多かったものの、乾物雌穂重は平年よりやや少なく、乾物総重および推定TDN収量は平年比103%および101%と平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		KD320		
		本年	平年	比較
播種期	(月・日)	5.17	5.16	1
出芽期	(月・日)	6.13	5.30	14
開花期	(月・日)	8.10	8.01	9
抽糸期	(月・日)	8.08	8.01	7
収穫期	(月・日)	9.28	9.26	2
収穫時の熟度		黄熟初期	黄熟初期	黄熟初期
草丈(cm)	(6月20日)	14.3	32.8	△ 18.5
	(7月20日)	154.8	169.1	△ 14.3
	(8月20日)	298.5	270.8	27.7
稈長(cm)	(9月20日)	267	244	23
葉数(枚)	(6月20日)	2.4	5.7	△ 3.3
	(7月20日)	10.5	13.4	△ 2.9
	(8月20日)	15.0	15.4	△ 0.4
生総重(kg/10a)		7839	6468	1371
乾物茎葉重(kg/10a)		1109	976	133
乾物雌穂重(kg/10a)		951	1023	△ 72
乾物総重(kg/10a)		2061	1998	63
同上平年比(%)		103	100	3
推定TDN収量(kg/10a)		1454	1437	17
同上平年比(%)		101	100	1
総体の乾物率(%)		26.3	30.9	△ 4.6
乾雌穂重割合(%)		46.3	51.1	△ 4.8
有効雌穂割合(%)		100	100	0.0

注1) 今年度から調査品種を「KD320」に変更。平年値は前4か年の平均。

2) 推定TDN収量＝乾物茎葉重×0.582＋乾物雌穂重×0.850。

3) 乾物収量や割合に関する一部の項目は、小数点以下の四捨五入などの計算方法により、表中の数値をもとに計算しても一致しない場合がある。

5) 大 豆

作 況：良

事 由：播種は平年より1日早い5月20日に行った。6月上旬は著しい低温となり、出芽期は平年より8日遅い6月11日であった。その後は高温傾向に転じ、開花始めは平年並の7月19日だったが、初期生育は抑制傾向であった。その後の生育と着莢、登熟は順調で、成熟期は平年より5日遅い9月27日で、登熟期間は平年

より5日長かった。平年と比較して、成熟期の主茎長、主茎節数、分枝数はいずれも下回ったが、着莢数は9%多かった。一莢内粒数は平年を下回ったが百粒重は26%重く、子実重は平年の125%と多収であった。屑粒率は低く、外觀品質は優った。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		ユキホマレ		
		本年	平年	比較
播種期	(月・日)	5.20	5.21	△ 1.0
出芽期	(月・日)	6.11	6.03	8.0
開花始	(月・日)	7.19	7.19	0.0
成熟期	(月・日)	9.27	9.22	5.0
主茎長(cm)	(6月20日)	4.4	10.6	△ 6.2
	(7月20日)	41.0	48.3	△ 7.3
	(8月20日)	64.2	63.6	0.6
	(9月20日)	62.2	63.8	△ 1.6
	(成熟期)	60.7	64.0	△ 3.3
本葉数(枚)	(6月20日)	0.2	0.8	△ 0.6
	(7月20日)	7.2	7.3	△ 0.1
主茎節数	(8月20日)	10.4	10.6	△ 0.2
	(9月20日)	9.9	10.3	△ 0.4
	(成熟期)	9.9	10.3	△ 0.4
分枝数(本/株)	(7月20日)	3.3	4.3	△ 1.0
	(8月20日)	5.6	5.5	0.1
	(9月20日)	4.4	4.8	△ 0.4
	(成熟期)	3.7	4.9	△ 1.2
着莢数(個/株)	(8月20日)	78.5	77.6	0.9
	(9月20日)	75.5	72.0	3.5
	(成熟期)	77.7	71.2	6.5
一莢内粒数		1.75	1.93	△ 0.18
子実重(kg/10a)		412	329	83
同上平年比(%)		125	100	25
百粒重(g)		38.5	30.5	8.0
屑粒率(%)		0.6	1.5	△ 0.9
品質(検査等級)		1等	2上	—

注1) 平年値は前7か年中、28年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 8月の着莢数は、莢の長さが2cm以上のものを示す。

3) 子実重は水分15%換算。

4) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

6) 小 豆

作 況：良

事 由：播種は平年より1日早い5月20日に行った。6月上旬は著しい低温傾向となり、出芽期は平年より10日遅い6月17日であった。6月末の降雨後に生育は回復し、生育は旺盛となった。開花始は平年並で、着莢と登熟は順調に進み、成熟期は平年と比較して6～7日早かった。平年と比較して成熟期の主茎長は長く、

主茎節数はやや多く、分枝数は同等、着莢数は3割以上多かった。一莢内粒数は同等からやや少なく、百粒重はやや軽かったが、子実重は「エリモショウズ」で平年比108%、「きたろまん」で120%と多収であった。屑粒率は低かったが、等級は色むらが指摘されわずかに劣った。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		エリモショウズ			きたろまん		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.20	5.21	△ 1	5.20	5.21	△ 1
出芽期	(月.日)	6.17	6.07	10	6.17	6.07	10
開花始	(月.日)	7.25	7.25	0	7.25	7.24	1
成熟期	(月.日)	9.25	10.01	△ 6	9.23	9.30	△ 7
主茎長	(6月20日)	2.0	4.0	△ 2.0	2.4	3.8	△ 1.4
(cm)	(7月20日)	21.8	17.0	4.8	21.2	16.0	5.2
	(8月20日)	79.7	65.6	14.1	83.6	67.3	16.3
	(9月20日)	88.0	68.3	19.7	96.1	71.7	24.4
	(成熟期)	87.2	69.3	17.9	93.2	70.5	22.7
本葉数	(6月20日)	0.1	0.4	△ 0.3	0.0	0.4	△ 0.4
(枚)	(7月20日)	7.4	6.5	0.9	6.8	6.2	0.6
	(8月20日)	14.0	14.3	△ 0.3	14.1	13.5	0.6
主茎節数	(9月20日)	14.3	14.3	0.0	14.0	13.4	0.6
	(成熟期)	14.7	14.1	0.6	14.4	13.5	0.9
分枝数	(7月20日)	3.0	1.8	1.2	2.3	1.5	0.8
(本/株)	(8月20日)	4.5	4.0	0.5	2.3	3.3	△ 1.0
	(9月20日)	4.5	4.1	0.4	2.8	3.4	△ 0.6
	(成熟期)	4.2	4.2	0.0	3.4	3.4	0.0
着莢数	(8月20日)	46.7	36.7	10.0	43.1	33.8	9.3
(個/株)	(9月20日)	62.1	52.3	9.8	56.1	48.8	7.3
	(成熟期)	67.1	50.8	16.3	65.1	47.6	17.5
一莢内粒数		6.17	6.45	△ 0.28	6.18	6.2	△ 0.02
子実重(kg/10a)		399	370	29	424	353	71
同上平年比(%)		108	100	8	120	100	20
百粒重(g)		14.5	16.0	△ 1.5	16.8	17.2	△ 0.4
屑粒率(%)		1.9	8.8	△ 6.9	3.5	5.4	△ 1.9
品質(検査等級)		4中	4上	—	4中	4上	—

注1) 平年値は前7か年中、平成28年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 8月の着莢数は、莢の長さが3cm以上のものを示す。

3) 子実重は水分15%換算。

4) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜 豆

作 況：良

事 由：播種は平年より1日早い5月20日に行った。6月上旬は著しい低温となり、出芽期は平年より2日遅い6月4日であった。出芽後も低温により初期生育は抑制傾向だったが、6月末の降雨後に急激に生育が旺盛となり、開花始は平年より1日早い7月9日だった。着莢と登熟は順調で成熟期は平年より1日遅い9月4日であり、平年と比較して草丈

は長く、主茎節数と分枝数は同等、着莢数はやや多かった。一莢内粒数はわずかに少なく、百粒重は重く、子実重は平年の124%と多収であった。小粒や色流れ粒が少なく、屑粒率は平年を下回り、等級も優った。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		大正金時		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.20	5.21	△ 1
出芽期	(月.日)	6.04	6.02	2
開花始	(月.日)	7.09	7.10	△ 1
成熟期	(月.日)	9.04	9.03	1
草丈 (cm)	(6月20日)	5.0	10.9	△ 5.9
	(7月20日)	44.9	38.0	6.9
	(8月20日)	48.3	43.5	4.8
	(成熟期)	48.3	42.8	5.5
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	0.7	△ 0.5
	(7月20日)	3.3	3.9	△ 0.6
主茎節数	(8月20日)	5.0	5.5	△ 0.5
	(成熟期)	5.3	5.5	△ 0.2
分枝数 (本/株)	(7月20日)	4.1	5.4	△ 1.3
	(8月20日)	4.5	5.0	△ 0.5
	(成熟期)	5.2	5.0	0.2
着莢数 (個/株)	(8月20日)	24.2	20.6	3.6
	(成熟期)	23.9	20.6	3.3
一莢内粒数		2.70	2.82	△ 0.12
子実重(kg/10a)		366	296	70
同上平年比 (%)		124	100	24
百粒重 (g)		73.0	65.6	7.4
屑粒率 (%)		5.4	25.8	△ 20.4
品質 (検査等級)		3 上	4 上	

注1) 平年値は前7か年中、平成28年令和元年(最豊)、令和3年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

8) ばれいしょ

作 況：平年並

事 由：植え付けは平年並の5月11日に行った。5月中旬の気温が高かったため、萌芽期は平年より3～4日早かった。開花始は平年より1～3日早かった。6月下旬以降は降水量がかなり多く、また日照時間は平年を下回る期間が長かったため、両品種ともに生育は軟弱であった。

早生の「男爵薯」では、枯ちよう期が平年より1日遅い9月1日であった。上いもの平均重、上いも数がともに平年をわずかに上回ったた

め、上いも重は平年比108%であった。晩生の「コナユタカ」では、枯ちよう期が平年並の10月14日であった。上いも数は平年より少なかったものの、上いもの平均重が大きく、上いも重は平年比99%と平年並であった。しかし、でん粉価は平年よりも1.6%低かったため、でん粉重は平年比94%とやや下回った。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		男爵薯			コナユタカ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期	(月.日)	5.11	5.11	0	5.11	5.11	0
萌芽期	(月.日)	5.26	5.30	△ 4	5.29	6.01	△ 3
開花始	(月.日)	6.28	6.29	△ 1	7.01	7.04	△ 3
枯ちよう期	(月.日)	9.01	8.31	1	10.14	10.14	0
茎長(cm)	(6月20日)	22.7	23.3	△ 0.6	11.6	13.4	△ 1.8
	(7月20日)	56	54	2	82	77	5
	(8月20日)	59	54	5	119	97	22
茎数(本/株)	(6月20日)	3.3	3.9	△ 0.6	2.0	2.7	△ 0.7
	(7月20日)	3.4	4.3	△ 0.9	3.0	2.8	0.2
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	5251	4849	402	3693	3911	△ 218
	(9月20日)	5161	4766	395	5032	5613	△ 581
でん粉価(%)	(8月20日)	16.4	15.2	1.2	18.8	19.0	△ 0.2
	(9月20日)	14.9	15.2	△ 0.3	19.4	21.0	△ 1.6
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	-	-	-	926	1117	△ 191
上いも数(個/株)		10.6	10.3	0.3	7.1	8.5	△ 1.4
上いも平均重(g)		109	106	3	210	175	35
上いも重(kg/10a)		5161	4766	395	6431	6475	△ 44
同上平年比(%)		108	100	8	99	100	△ 1
でん粉価(%)		14.9	15.2	△ 0.3	20.4	21.5	△ 1.1
でん粉重(kg/10a)		-	-	-	1244	1328	△ 84
同上平年比(%)		-	-	-	94	100	△ 6

注) 平年値は前7か年中、平成30年(最凶)、令和3年(最豊)を除く5か年の平均

9) てんさい

作 況：不良

事 由：移植栽培の播種は、平年より1日遅い3月24日に行った。以降、4月中旬まで気温が高めに経過したため、育苗期間中の苗の生育は非常に良好であった。移植は、平年より2日早い5月2日に行った。前日まで土壌は乾燥していたが、移植直前の降雨で土壌が適湿となったため、活着は良好であった。その後は乾燥傾向が続き、5月上旬の強風もあいまって生育が抑制された。

直播栽培の播種は、平年より1日遅い5月6日に行った。播種時およびそれ以降に土壌が乾燥傾向であったため、出芽期は平年より1日遅い5月18日であったものの、出芽揃いが例年よりやや劣った。

5月中旬以降に続いた乾燥傾向は5月27～28日の降雨で解消したものの、6月上旬の低温、寡照傾向のため、6月中旬まで生育は抑

制された。

7月以降の多雨で地上部の生育が旺盛になり、草丈および茎葉重は平年を上回って推移したが、根部の肥大は回復が遅れた。

その後、多雨傾向は収穫期まで続き、地上部生育は平年を上回る傾向であったが、根部の生育は平年を下回った。

収穫は、平年より1～2日遅い10月21日に行った。

最終的に、茎葉重は平年を上回ったが、根重は平年をやや下回った。根中糖分は、夏期の気温が高めに推移したことや9月中旬から10月上旬までの多雨の影響もあって、平年をやや下回った。このため、糖量は平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表 その1

調査項目		移植						直播		
		アンジー			アマホマレ			アンジー		
		本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較
播種期	(月. 日)	3. 24	3. 23	1	3. 24	3. 23	1	5. 06	5. 05	1
移植期	(月. 日)	5. 02	5. 04	△ 2	5. 02	5. 04	△ 2	-	-	-
出芽期	(月. 日)	-	-	-	-	-	-	5. 18	5. 17	1
収穫期	(月. 日)	10. 21	10. 19	2	10. 21	10. 19	2	10. 21	10. 20	1
草 丈 (cm)	(5月20日)	7. 2	6. 5	0. 7	6. 6	7. 0	△ 0. 4	-	-	-
	(6月20日)	15. 0	24. 7	△ 9. 7	16. 4	25. 8	△ 9. 4	10. 6	14. 0	△ 3. 4
	(7月20日)	58. 7	52. 3	6. 4	61. 3	52. 9	8. 4	60. 9	47. 9	13. 0
	(8月20日)	65. 1	57. 8	7. 3	69. 3	59. 0	10. 3	68. 2	59. 5	8. 7
	(9月20日)	67. 0	58. 9	8. 1	71. 3	61. 4	9. 9	70. 2	61. 0	9. 2
生葉数 (枚)	(5月20日)	7. 5	6. 1	1. 4	4. 8	5. 0	△ 0. 2	-	-	-
	(6月20日)	11. 9	12. 4	△ 0. 5	11. 4	11. 6	△ 0. 2	7. 2	8. 8	△ 1. 6
	(7月20日)	22. 2	21. 0	1. 2	22. 7	20. 2	2. 5	21. 1	18. 9	2. 2
	(8月20日)	27. 2	27. 9	△ 0. 7	24. 7	25. 9	△ 1. 2	25. 5	26. 1	△ 0. 6
	(9月20日)	27. 4	30. 5	△ 3. 1	23. 4	28. 8	△ 5. 4	26. 5	27. 6	△ 1. 1
茎葉重 (g/個体)	(5月20日)	0. 9	1. 2	△ 0. 3	0. 9	1. 4	△ 0. 5	-	-	
	(6月20日)	25	76	△ 51	24	81	△ 57	8	13	△ 6
	(7月20日)	579	497	82	661	551	110	589	337	252
	(8月20日)	973	764	209	983	824	159	956	690	266
	(9月20日)	766	740	26	858	840	18	805	716	89

注1) 平年値は前7か年中、令和3年(最豊)平成28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 本年から、調査品種を「リッカ」から「アンジー」に変更。

表 その 2

調査項目		移植						直播		
		アンジー			アマホマレ			アンジー		
		本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較
根 重 (g/個体)	(6月20日)	5	16	△ 11	5	19	△ 14	0	1.0	△ 1
	(7月20日)	247	270	△ 23	245	265	△ 20	169	125	44
	(8月20日)	764	738	26	678	735	△ 57	637	571	66
	(9月20日)	1015	1031	△ 16	934	1028	△ 94	797	854	△ 57
根 周 (cm)	(7月20日)	22.4	23.5	△ 1.1	21.8	23.0	△ 1.2	21.2	17.7	3.5
	(8月20日)	34.1	34.0	0.1	31.0	32.7	△ 1.7	33.0	30.4	2.6
	(9月20日)	37.2	38.1	△ 0.9	35.8	37.5	△ 1.7	35.0	35.1	△ 0.1
根中糖分 (%)	(9月20日)	16.47	16.50	△ 0.03	17.02	16.90	0.12	16.28	16.70	△ 0.42
茎葉重(kg/10a)	(収穫期)	5884	4814	1070	6727	5494	1233	6318	4726	1592
根 重(kg/10a)	(収穫期)	7185	7661	△ 476	6915	6982	△ 67	6434	6478	△ 44
同上平年比 (%)		94	100	△ 6	99	100	△ 1	99	100	△ 1
根中糖分 (%)	(収穫期)	17.59	18.50	△ 0.91	18.15	19.10	△ 0.95	17.52	18.60	△ 1.08
同上平年比 (%)		95	100	△ 5	95	100	△ 5	94	100	△ 6
糖量(kg/10a)	(収穫期)	1264	1412	△ 148	1254	1331	△ 77	1127	1209	△ 82
同上平年比 (%)		90	100	△ 10	94	100	△ 6	93	100	△ 7

注 1) 平年値は前 7 か年中、令和 3 年（最豊）平成 28 年（最凶）を除く 5 か年の平均。

2) 本年から、調査品種を「リッカ」から「アンジー」に変更。

10) 牧 草（チモシー）

作 況：良

事 由：1 番草：萌芽期は平年より 2 日早い 4 月 18 日で、冬損は認められなかった。6 月上旬が平年より低温であったものの、5 月下旬および 6 月中旬は平年並からやや高温で推移したことから、出穂始は平年より 1 日早い 6 月 9 日、出穂期は平年と同日の 6 月 14 日であった。刈取時の草丈および出穂程度は平年並であり、乾物収量も平年比 102%と平年並であった。

2 番草：収穫は平年より 3 日遅い 8 月 8 日に行った。1 番草収穫後は十分な降水量があったため、収穫時の草丈は平年より 19cm 高く、節間伸長程度も平年より高かった。乾物収量

は平年比 178%と非常に多く、1 番草との合計乾物収量は平年比 123%であった。

3 番草：収穫は平年より 1 日遅い 10 月 3 日に行った。2 番草収穫（8 月 8 日）以降の気温は平年より高く、降水量は 8 月下旬から 9 月上旬を除き平年並から多く推移した。収穫時の草丈は 40cm と平年並であったものの、乾物収量は平年より 19% 少ない 101kg/a であった。一方で、年間合計乾物収量は平年比 117%と多収であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

品種名 調査項目		なつちから		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月. 日)	4. 18	4. 20	△ 2
冬損程度		1. 0	1. 2	△ 0. 2
被度 (%)	(5月20日)	100	100	0
	2 番草再生時	100	100	0
出穂始 (月. 日)		6. 09	6. 10	△ 1
出穂期 (月. 日)		6. 14	6. 14	0
出穂程度	1 番草	7. 8	7. 2	0. 6
節間伸長程度	2 番草	6. 0	4. 1	1. 9
収穫日	1 番草	6. 17	6. 16	1
	2 番草	8. 08	8. 05	3
	3 番草	10. 03	10. 02	1
倒伏程度	1 番草	1. 0	1. 0	0. 0
病害罹病程度	1 番草	1. 0	1. 0	0. 0
	2 番草	2. 0	2. 4	△ 0. 4
	3 番草	2. 0	3. 1	△ 1. 1
草丈 (cm)	(5月20日)	37	40	△ 3
	(6月5日)	67	73	△ 6
	1 番草	93	96	△ 3
	2 番草再生時	47	39	8
	2 番草	85	66	19
	3 番草再生時	36	36	0
	3 番草	40	38	2
生草収量 (kg/10a)	1 番草	2, 504	2, 375	129
	2 番草	1, 253	822	431
	1 + 2 番草計	3, 757	3, 197	560
	3 番草	307	436	△ 129
	合 計	4, 064	3, 633	431
乾物率 (%)	1 番草	22. 3	23. 2	△ 0. 9
	2 番草	29. 7	25. 6	4. 1
	3 番草	32. 9	28. 7	4. 2
乾物収量 (kg/10a)	1 番草	557	549	8
	同上平年比 (%)	102	100	2
	2 番草	371	208	163
	同上平年比 (%)	178	100	78
	1 + 2 番草計	928	757	171
	同上平年比 (%)	123	100	23
	3 番草	101	124	△ 23
	同上平年比 (%)	81	100	△ 19
	合 計	1, 029	882	147
	同上平年比 (%)	117	100	17

注 1) 平年値は前 7 か年のうち平成 28 年 (最豊)、令和 3 年 (最凶) を除いた前 5 か年の平均値。

2) 冬損程度は 1: 無または微～9: 甚。出穂程度および節間伸長程度は 1: 無～9: 極多。

倒伏程度および病害罹病程度は 1: 無または微～9: 甚。病害は主に斑点病。

付表 1 各作物の耕種概要

作物名	一区 面積 (㎡)	反 復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株 本数	播種粒 数 (粒/ ㎡)	播種量 (kg/10 a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	5.4	4	緑肥大豆	20.0	ドリル	—	255	—	—
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	—	340	—	—
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	—	—	7,491
4. 大 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
5. 小 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
6. 菜 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	—	—	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生 えん麦	60.0	23.8	1	—	—	7,003
9. 牧 草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	—	—	2.0	—

付表 2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量(kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	18.8	7.5	3.8	—	起生期追肥 N: 5.0	H27年より変更
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	—		
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル:150	
4. 大 豆	1.8	15.0	7.8	3.0	—		
5. 小 豆	4.0	20.0	11.2	4.0	—		
6. 菜 豆	4.0	20.0	11.2	4.0	—		
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0	—		
8. てんさい	15.0	30.0	12.3	6.8	—		
9. 牧 草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	3.0	—	〔 造成時 炭カル:200 ダブリン:30〕	2年目草地 年間3回分施

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

1) 麦類に関する試験

麦類畑作グループ（麦類）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「優良品種決定調査」では秋まき小麦の「北見99号」、「北見100号」「北見101号」、春まき小麦では「北見春83号」「北見春85号」を供試し、「北見101号」「北見春83号」は試験中止とした。春まき小麦「北見春86号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW10号」等について適応性を検討した。

二条大麦では、「二条大麦の品種選定試験」により適応性検定試験を行い、「札育10号」を試験継続とし、「札育11号」を新配布系統とした。

2) 畑作物に関する試験

麦類畑作グループ（畑作）は豆類やてん菜などの畑作物の新品種育成や品種選定、栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験を、「畑作物の地域適応性検定試験（大豆系適相当）」として場内圃場で十系統14系統の適応性の検定を行った。「畑作物の地域適応性検定試験（優決基本相当）」で小豆については、場内試験で十系統2系統、現地試験（清里町）十系統1系統の検定を行った。菜豆については場内試験で十系統2系統、現地試験（美幌町）十系統1系統の検定を行った。

てん菜では、「てん菜輸入品種検定試験」として、民間育成の9系統を検定した。そのうち「HT50」および「KWS 8K839」が北海道優良品種に認定された。その他、継続検討が3系統、廃棄が4系統である。

3) ばれいしょに関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は「馬鈴しょ品種開発事業Ⅱ」により、安定多収な品種の育成を進めている。また、「ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発」ではジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性を有するでん粉原料用品種の育成、ホクレンとの共同研究課題「「トヨシロ」置き換えの馬鈴しょ品種開発強化」では熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んでいる。

選抜効率の向上については、「でん粉原料用馬鈴しょにおける早掘り適性をもつ多収品種の開発強化」で中期世代の9月上旬収穫による早期肥大性の評価、有望系統の栽培特性および主産地適応性を評価し、収量安定性の高い有望系統開発を強化している。「馬鈴しょGr・PVY等の抵抗性品種開発強化および特性検定試験」では育成3年目の系統について、ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモYウイルス、ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性遺伝子および海外において枯ちよう期との関連が報告されている遺伝子を対象にしたDNAマーカーによる選抜を実施している。

品質の向上については「でん粉原料用馬鈴しょにおける高品質でん粉系統の選抜強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の選抜強化」により、でん粉品質並びにチップ加工適性が優れる品種の開発促進を行っている。

耐病性の向上については「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の選抜強化」の各課題により、前出の課題と合わせて耐病虫性（ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモシロシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れる品種の開発促進を進めているとともに、特性検定試験を実施している。

「優良品種決定調査」では、加工用2系統

およびでん粉原料用1系統について検討し、「北育31号」を試験中止、「北育29号」及び「北育32号」を継続検討とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成3系統について生産力検定並びに病虫害抵抗性検定を行い、「CP17」を試験中止、「CP15」及び「CP16」を継続検討とした。

4) 牧草・飼料作物に関する試験

馬鈴しょ牧草グループ(牧草)では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、品種比較試験、栽培試験および資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業Ⅱ」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。また、北海道農業研究センターが育成したアカクロバ2系統、サイレージ用とうもろこし1系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「飼料品質の向上に寄与するチモシー新品種の開発促進」では、早生育成2系統の生産力検定試験及び広域適応性早生2系統の生産力予備検定試験を実施したほか、新たな育種素材の特性評価を実施した。(一社)日本草地畜産種子協会との共同研究「道内の多様な環境に適応するチモシー品種の開発」では、広域適応性早生2系統の生産力予備検定試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」および「飼料作物品種比較試験(ペレニアルライグラス品種・系統の特性検定調査)」では、牧草3草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。民間受託試験「UPOVに準拠したチモシー品種登録審査基準策定のための基礎調査」では、UPOVテストガイドラインの改定に伴う国内の品種登録審査基準改定のための標準品種候補の審査形質データを収集した。

また、職員研究奨励事業として、「チモシーの耐暑性検定法の検証とゲノム解析の深化」に取り組んだ。

5) 栽培環境に関する試験

生産技術グループ(栽培環境)は、土壌肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施している。

本年度は、終了課題「窒素施肥適正化のためのリアルタイム土壌診断技術の開発」(中央農試と共同)を「移植たまねぎにおける窒素動態と土壌診断に基づく窒素分施肥技術」として取りまとめ、北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、令和5年指導参考事項に採択された。「農業研究推進事業(生産現場に蓄積したビッグデータの活用による生産性向上手法の検討)」(単年度の課題 中央農試、十勝農試と共同)は成績会議に提出せず、次年度以降、中央農試が継続実施する。「革新的技術導入による地域支援ーオホーツク地域における秋まき小麦「きたほなみ」の気象変動に対応した窒素施肥管理技術の現地実証ー」は成績会議に提出せず、網走農業改良普及センター畑作部会およびオホーツク地域農業技術支援会議関係者会議で成果を報告した。

継続課題として、「リモートセンシングと圃場情報を活用した干湿害多発農地の診断手法の開発」(中央農試、十勝農試と共同)、「早期出荷向けたたまねぎ(SN-3)における品質向上技術の開発」、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同)、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同)、「農作物病虫害診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壌調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試、花野センターと共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進(第3期)2)(5)新しい選抜法を活用した収量性の選抜強化」(麦畑Gと共同)、「同3)(1)春まき小麦新品種候補「HW8号」の高品質多収栽培技術の開発」(中央農試、上川農試、十勝農試と共同)および「畑作物に対する肥効調節型肥料の施用効果試験」(上川農試、十勝農試と共同)である。

6) 病害虫に関する試験

生産技術グループ（病虫）は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、馬鈴しょのそうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウの抵抗性評価、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験（新農業効果査定試験）および病害虫発生予察事業を実施している。

本年度は、終了課題「インファロー散布を活用した馬鈴しょ害虫の防除法の確立」を「インファロー散布を活用したばれいしょ害虫の防除法」として取りまとめ、また令和3年度まで実施していた「侵入シストセンチュウ類の緊急防除後の営農再開・再発防止支援技術の開発 3. Gpの再発生を防ぐ総合対策技術の開発（2）捕獲作物・抵抗性品種等の高度利用によるGp密度低減技術の開発」（北農研と共同）および本年度から新たに実施した課題である「ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発

3. 捕獲作物および抵抗性作物を活用したPCN防除技術の開発」（北農研と共同）の1カ年分のデータを「トマト野生種栽培によるジャガイモシロシストセンチュウ密度低減技術の最適化と利用法の拡大」として取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）に提出し、令和5年指導参考事項に採択された。「馬鈴しょGr・PVY等の抵抗性品種開発強化および特性検定試験」（馬鈴しょ牧草Gと共同）は成績会議に提出せず、次年度から始まる後継課題で継続実施する。

継続課題として、「病害虫発生予察調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」（馬鈴しょ牧草Gと共同）、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」（そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草G、中央農試、上川農試、十勝農試、北農研と共同）、「赤さび病の適正防除による秋まき小麦「きたほなみ」の多収技術の確立」（中央農試と共同）を実施した。この内、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花

野菜セと共同）において「だいこんのヒメダイコンバエの防除対策」（北見農試）を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発 3. 捕獲作物および抵抗性作物を活用したPCN防除技術の開発」（北農研と共同）、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の選抜強化」（疫病菌の接種による実生個体選抜、塊茎腐敗抵抗性検定、馬鈴しょ牧草Gと共同）である。

単年度試験として「データを活用した病害虫防除予測技術の開発」を実施した。

7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議3回、五者会議（普及センター本所にて、対面開催）ならびに地域関係者会議（Web開催、事務局は普及センター本所に集合し対応）を開催し、地域ニーズ（本年度ニーズ2回、過年度ニーズ6回）の現地の聞き取り調査や対応・ニーズ元への回答等を行った。

プロジェクト課題の該当は無かった。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については、研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

1) 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

耕種（水稻・畑作・園芸）については、①水稻部会研修にかかる支援、②畑作部会研修にかかる支援、③ばれいしょ作付ほ場における土壌交換酸度の測定についての支援、④秋まき小麦の効果的な施肥法の確立、⑤「きたほなみ」畦幅比較試験における受光態勢の調査、評価、⑥秋まき小麦倒伏軽減に対するケイ酸加里資材の効果確認に関する調査・分析、⑦澱粉原料用ばれいしょ品種「コナヒメ」の早期枯凋対策に向けた栽培法の確立、⑧清里町清泉地区におけるそうか病の発生原因と対策の検討、秋まき小麦の安定生産に向けたは

種時期の再検討、⑨菜豆（赤系金時）の皮切れ症状（裂皮症）の原因究明と対策の検討、⑩園芸部会研修にかかる支援を行った。

植物保護については、①ニンジン黄化病に対する効果的な防除方法の確立、②秋まき小麦各種病害（赤さび病、ふ枯れ病、葉枯症状）対策にかかる調査手法の習得および情報交換、③センキュウにおける葉枯症状の原因解明および対策方法の確立、④大空町東藻琴芝桜公園における「ナガチャコガネ」被害低減対策、⑤アスパラガス茎枯病に対する効果的な防除方法の確立、⑥キャベツのヒメダイコンバエ発消長と防除対策について、⑦だいこん栽培におけるヒメダイコンバエの効果的な防除法について（2ヵ所）、などに関する情報提供および助言を行った。

経営については、大規模畑作経営における労働補完システム導入による経営的評価について支援と、農産物生産費集計システムの活用について支援した。また、スマート農業については、秋まき小麦「雪腐病」におけるドローンによる薬剤散布の効果検証を支援した。

畜産については、①畜産部会研修にかかる支援（網走農業改良普及センターの地域課題解決研修として、搾乳ロボットにおける生菌数の調査方法及び乳質改善対策の手法を研修対応した）、②後継牛の確保に向けた哺育育成管理について支援した。以上①・②については他担当普及室へ支援を要請した。

人材育成については、新任職員に対する研修支援を行った。

GAPの取組みについては、認証取得に対する取組事例紹介を行った。

病虫害や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたった。

2) 調査研究の実施

調査研究は3課題である。

1つ目は、「菜豆（赤系金時）の皮切れ症状（裂皮粒）の原因究明と対策の検討」である。

赤系金時のオホーツク管内での作付面積は414haであり、その87%は美幌支所管内の3農協で生産されている。近年、裂皮粒などの被害粒が多く、等級各付けでは等外が最も多い

ほか主力品種の製品歩留まりが低いことから、農業者・農協の収益性や、ホクレンの販売戦略にも影響を及ぼしている。

赤系金時は秋まき小麦の前作として輪作体系維持のためにはなくてはならない作物であり、令和3年度から農協、ホクレン、ビーンズファクトリー、普及センターで被害粒対策の取り組みを開始した。技術普及室への支援養成により、北見農試麦類畑作Gと連携して、令和3年度から課題解決に取り組んだ。

関係機関、普及センターの検討の場に同席し、被害の実態を確認し、既往の知見について情報提供を行った。

被害の発生要因として次の3点を考えた。

①収穫時の子実水分、②機械収穫時の打撲等による損傷、③施設内（受入・乾燥・選別工程）での打撲等による損傷

②、③は、打撲を軽減する対策（部品装着など）がすでに取りれていたが、さらに改善を進めた。主原因と考えられた①については、成熟状況を確認するために各農業者が作物体を持ち寄り、莢内の子実の状態を確認する機会（目合わせ会）を設け収穫タイミングについて情報交換を行った。また、適期収穫について情報発信した結果、受入時の子実水分20%未満以下の割合は令和2年の72%から50%に減少した。

以上の取り組みにより、裂皮粒率は低下した。

令和4年度は前年度の取り組みを受け、過去の気象・作況データを用いて、成熟期予測を試みた。その結果、出芽後日数と積算気温に関係性があり、±3日の精度で予測可能であることを示した。収穫適期を逃さないために活用できる。

また、適正栽植密度の検討も行い、現状の疎植栽培（株間24cm）よりも密植（株間18cm）とすることで茎折れ発生率が軽減でき、安定生産につながることを示した。

2つ目は、「大規模畑作経営における労働補完システム導入前後の経営的变化に関する考察」である。

オホーツク管内S町I地区5戸のうち共同化を行っている3戸（A、B、C）について、共同作業導入前の平成30年から共同化初年目

となる令和3年（Fのみ令和2年）までの所得構造の変化を、道総研H26成果物である「青色申告書による所得解析ツール」を用いて解析した。

A氏・・・所得額（32,469→9,605千円；所得変化率-70.4%）、経営耕地面積（39.9→40.8ha）、所得率（37.9→10.5%）であった。基準年に比べ、収入は17.6%増加した（その他収入17,732千円）ものの経費も88%増加しており、その主な内訳は種苗費4.7%、保管・調製料9.6%、固定資産圧縮損38.8%（8,280→21,000千円）があげられた。農産物の規模や生産量に大きな変化は無かった。

B氏・・・所得額（26,946→11,557千円；所得変化率-57.1%）、経営耕地面積（43.1→43.9ha）、所得率（28.1→12.1%）であった。基準年に比べ、収入が2.8%減少したことに加えて経費も54.3%増加しており、その主な内訳としては、固定資産圧縮損68.4%（3,874→22,340千円）、肥料費-25.9%、農薬費-5.9%があげられた。一方、肥料費が減少した理由としては、土壌診断の活用や有機物の積極的な投入があげられた。また、農作物収入については、馬鈴薯16.5%、甜菜25.1%、小豆-18.8%、にんじん-42.5%の変化があった。

C氏・・・所得額（19,469→-7,037千円；所得変化率-136.1%）、経営耕地面積（33.1→34.0ha）、所得率（28.4→-7.7%）であった。基準年に比べ、収入が117.6%増加した一方、経費も253.7%増加しており、その主な内訳としては、固定資産圧縮損142.3%（0→27,731千円）、肥料費14.2%、農薬費4.2%があげられた。また、農作物収入が軒並み増加（117.6%）し、内訳は豆類35.3%（小豆23.6%、その他豆類11.6%→作付面積の拡大）、にんじん25.7%（→単価上昇）などであった。

以上、3事例とも作業共同化に備え、個人所有を維持しながら、機械のスペックを上げるべく、ほぼ同時期に大型機械を更新しており（補助金活用）、固定資産圧縮損の増加が顕著であった。しかし、その主な目的は節税対策（農業経営基盤強化準備金への繰入）であり、キャッシュフロー上には大きな影響がないと推察された。また、各農産物の作付規模や単収の変化は個々の条件や対応による差が大きかった。

今後、農作物収入の変動（作付構成や市況等）といった個々の経営における課題解決を図りながら、ハイスペック化された共同作業基盤を活用し、経費節減・所得率の向上・作業効率の向上を図り、適切な規模へ発展・拡大されて行くことが期待される。

3つ目は、「だいこんにおけるヒメダイコンバエの総合的防除対策の検討」である。

北見農試の現地試験を核として根釧地域の普及指導員を対象とし情報交換会を行い、以下の事項について検討した。

①黄色水盤による発生消長の確認

本年は、釧路本所管内および釧路中西部支所管内のだいこん栽培圃場に黄色水盤を設置したが、誘殺数は過去数年と比べ少なく推移した。一方で、黄色水盤設置圃場では成虫の誘殺数によらず幼虫の食害が確認された。発生消長については、過去の状況と大きな差はみられなかった。黄色水盤による調査は、発生が少なく推移しても食害数は変わらないことから、発生消長を確認するツールとしての利用とする。

②薬剤による防除対策の検討

昨年に引き続き、研究課題としての現地試験を実施した。大根に登録のある粒剤の効果は、薬剤により差があることがわかった。また、激発時ではほとんどの粒剤で効果がみられなかった。最も効果的であった粒剤は令和4年から販売中止となった。また、現地試験の結果から茎葉処理はすべての薬剤で効果がみられなかった。ただし、粒剤処理後の茎葉処理に関する体系処理においては、不明である。

③耕種的防除法

研究課題で蛹の埋没試験を実施された。深く埋め込むことで羽化率が低下したが、40cm深でも羽化が見られた。

これらのことから、薬剤防除だけでは、食害を防ぐことが難しいことから、収穫後の早期すき込み、秋のプラウ耕など総合的な対策を実施した上で、効果のある粒剤の体系処理確立が必要である。

３）地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議の活動は、要望のあった11課題（新規２課題、過年度継続9課題）に対して、現地聞き取り調査を４カ所で行った。五者会議は３年ぶりの対面開催、地域関係者会議は初のリモート開催となった。

技術体系化チームの活動はなかった。

４）農業試験場における普及指導員の研修実施

本年度の高度専門技術研修（畑作および植物保護・前期）を北見農試内で実施する予定だったが、畑作は受講該当者不在のため中止した。植物保護(6月6日から５日間)は予定どおり実施できた。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 其田達也. 秋まきコムギ新品種「北見95号」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 第107号15-28. (2022)
- 木内均. 水稻新品種「えみまる」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 第107号 1-13. (2022)
- 笠島 真也・山田 翔太・伊藤 博武・大西 志全・神野 裕信・高橋 肇. 登熟期間の乾物生産と窒素蓄積からみた秋播性コムギ品種「きたほなみ」の多収性. 日本作物学会紀事 91: 322-327 (2022)
- 池谷 聡・千田 圭一・藤田 涼平・入谷 正樹・田中 静幸. ジャガイモ疫病圃場抵抗性を持つバレイショ早生系統の選抜と「北系 29 号」の育成. 育種学研究 24: 153-159 (2022)
- 小宮山 誠一・本田 博之・池谷 聡・阿部 珠代・中道 浩司・佐々木 亮・竹内 薫 近赤外分光法によるテンサイショ糖含量の非破壊連続測定法. 日本食品科学工学会誌 70: 187-194 (2023).
- 足利和紀. チモシー (*Phleum pratense* L.) における初期生育性の遺伝率と間接選抜指標. 北海道畜産草地学会報 11: 1-12 (2023).
- Yoshifumi So, Ayman Khamis Elsayed, Akeo Iwasaki, Yoshie Nishiwaki, Junichi Yukawa, Makoto Tokuda. First report of the genus *Vitisiella* in Japan, with description of a new species inducing leaf galls on *Vitis vinifera* L. (Vitaceae). Proceedings of the Entomological Society of Washington 124: 535-548 (2022).

2) 口頭発表

- 其田達也. 小麦穂発芽研究の大家長内俊一氏を偲んで. 穂発芽研究会 (オンライン開催, 2023. 3. 1).
- 其田達也. 北見農試における長内系統の活用. 穂発芽研究会 (オンライン開催, 2023. 3. 1).
- 大西志全. 0W104からコムギ縮萎縮病抵抗性を導入した日本麺用有望系統「北見99号」の育成. 穂発芽研究会 (オンライン開催, 2023. 3. 1).
- 大西志全・木内 均・飯島俊匡・浦池隆文・阿出川さとみ・佐藤優美・其田達也・荒木和哉. サーモグラフィー搭載 UAV または放射温度計により測定した葉面温度によるコムギ収量性の系統選抜. 日本育種学会第143回講演会 (2023. 3. 17).
- 道満剛平・大西志全・来嶋正朋・堀川謙太郎・菅原 彰・井上哲也・山口直也. 遺伝子型×環境交互作用 (G×E) を加味した秋まき小麦育成系統の収量安定性評価. 日本育種学会・作物学会北海道談話会令和4年次講演会 (オンライン開催, 2022. 12. 3).
- 池谷 聡. 特別講演「テンサイ直播適性はどこまであきらかになったか」. (オンライン開催, 2022. 7. 20).
- 田澤暁子・小林聡・笹村直弥. 道東地域におけるダイズの狭畦密植栽培による収量構成要素の変化. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 (オンライン開催, 2022. 12. 3).
- 飯田憲司. 人工気象器を用いたチモシーの耐暑性 (高温ストレス耐性) の評価. 日本草地学会札幌大会 (2023. 3. 26-3. 28).
- 足利和紀. チモシー遺伝資源の潜在的アレロパシー活性の変異. 日本草地学会札幌大会 (2023. 3. 26-3. 28).
- 足利和紀. チモシー海外遺伝資源の潜在的アレロパシー活性と抵抗性によるグルーピング. 日本草地学会札幌大会 (2023. 3. 26-3. 28).

- 佐々木太陽・丸山麻理弥・小野寺鶴将. ジャガイモのナストビハムシに対するインファロー散布機を用いた現地実証. 第76回北日本病害虫研究発表会 (2023. 2. 21-22).
- 丸山麻理弥・佐々木太陽・小野寺鶴将. ジャガイモのジャガイモヒゲナガアブラムシに対するインファロー散布の効果. 第76回北日本病害虫研究発表会 (2023. 2. 21-22).
- 田中一生・横川愁斗・添島 均. 北海道の水稻における登熟期間の高温処理による胴割粒発生の品種間差. 日本作物学会第254回講演会 (2022. 9. 20).

3) 専門雑誌記事

- 大西志全. 「ケーキ、クッキーに適した「北見95号」の特性」. 農家の友11月号 60-61 (2022)
- 池谷 聡. てんさい新品種「H154」. 北農 89巻第2号 22-23 (2022).
- 池谷 聡. てんさい新品種「KWS 8K879」. 北農 89巻第2号 24-25 (2022).
- 池谷 聡. 除草剤耐性を持ち雑草管理を省力化できるてん菜新品種「KWS8K879」の特性. 農家の友 7月号 46-49 (2022).
- 池谷 聡. 除草剤耐性てんさいを用いた新除草体系. 植調 第56巻7号 187-192 (2022).
- 池谷 聡. 北海道のてんさいで初めて除草剤耐性を持つ新品種「KWS 8K879」. グリーンテクノ情報 72号 6-10 (2022).
- 池谷 聡. 除草剤耐性を持つてんさい新品種「KWS 8K879」. ニューカントリー 2月号: 68-69 (2023).
- 飯田憲司. とうもろこし (サイレージ用) 新品種「ミリアーノ (HK1614)」. 北農 89巻2号 36-37 (2022).
- 飯田憲司. サイレージ用トウモロコシ「ミリアーノ」. デーリィマン 2022年12月号 76-77 (2022).
- 飯田憲司. とうもろこし (サイレージ用) 「ミリアーノ」. 農家の友 2022年6月号 46-47 (2022).
- 足利和紀. 質・量・強さに優れるチモシー新品種「センリョク」. 農業および園芸 第97巻第7号 575-588 (2022).
- 足利和紀. チモシーの雑草に対する競合力の改良に向けた育種とその展望. 畜産技術 2022年12月号 2-6 (2022).
- 上堀孝之. 令和4年技術総括 (畑作). 「農家の友」 12月号 23-25 (2022).
- 上堀孝之. 2023作物展望 (畑作). ニューカントリー 1月号 50-51 (2023).
- 小倉玲奈. でん粉原料用ばれいしょにおける早期枯凋症状の要因と半身萎凋病に対する品種間差. ニューカントリー 7月号 48-49 (2022).
- 小倉玲奈. でん粉原料用ばれいしょにおける早期枯凋症状の要因と半身萎凋病に対する品種間差. 農家の友 8月号 76-77 (2022)

4) 著編書、資料

- 池谷 聡. ジャガイモ大辞典 (さやあかね). 農文協. 189-201 (2023. 1).
- 田澤 暁子. 蔬菜の新品種ーたまねぎ新品種「すらりっぷ」. 誠文堂新光社 (公益財団法人園芸植物育種研究所). (2023).
- 上堀孝之. 令和4年産豆類の生育、豆類栽培の考え方、輪作の必要性と事例、土作り、排水対策、除草剤の使用と中耕除草. 明日の豆作り. 公益財団法人日本豆類協会 32-46, 94-95 (2023).
- 小山拓也. 豆類の病害虫. 明日の豆作り. 公益財団法人日本豆類協会 96-120 (2023).
- 田中一生. 北海道の米づくり (改訂版). 北海道農産協会.

5) 新聞記事

- 池谷 聡. テンサイ新品種「ソラーレ」. 農業共済新聞 (2022. 9. 7).
- 池谷 聡. てんさい新品種「KWS 8K879」. 農業共済新聞 (2023. 3. 22).
- 飯田憲司. トウモロコシ (サイレージ用) 新品種「ミリアーノ」 農業共済新聞 (2022. 10. 19)

○小倉玲奈. でん粉原料用ばれいしょにおける早期枯凋症状の要因と半身萎凋病に対する品種間差. 農業共済新聞 (2022. 9. 1).

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) てん菜新品種候補「KWS 8K839」
- (2) てん菜新品種候補「HT50」
- (3) とうもろこし(サイレージ用)「P7948」

2) 普及推進事項

- (1) 秋まき小麦「きたほなみ」の気象変動に対応した窒素施肥管理(補遺)

3) 指導参考事項

- (1) 移植たまねぎにおける窒素動態と土壌診断に基づく窒素分施肥技術
- (2) トマト野生種栽培によるジャガイモシロシストセンチュウ密度低減技術の最適化と利用法の拡大
- (3) インファロー散布を活用したばれいしょ害虫の防除法
- (4) 令和4年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫
- (5) 除草剤
 - ①てんさい(ALS阻害剤耐性)(直播)に対する除草剤「BCH-181フロアブル(コンビソOD)」の実用化(少水量拡大)
 - ①てんさい(ALS阻害剤耐性)(直播)に対する除草剤「BCH-181フロアブル(コンビソOD)」の実用化(多水量拡大)
- (6) 殺虫・殺菌剤
 - ①小麦の雪腐大粒菌核病に対するインピルフルキサム水和剤Fの効果
 - ②ばれいしょのナストビハムシに対するチアメトキサム水溶剤SG(処理法変更・植溝内土壌散布)の効果

4) 研究参考事項

なし

3 品種登録・特許申請

なし

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	R 4. 4. 13	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 5. 11	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 6. 1	農試講堂	場員
新規課題場内検討会議	R 4. 6. 15	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 7. 13	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 8. 3	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 9. 7	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 10. 5	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 11. 2	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 4. 12. 14	農試講堂	場員
現地委託試験成績検討会	R 4. 12. 1	訓子府町公民館 講堂(web併用)	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体
成績会議場内検討会	R 4. 12. 8	訓子府町公民館 多目的ホール	場員
定例庁内会議	R 5. 1. 12	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	R 5. 2. 16, 17	訓子府町公民館 多目的ホール	場員
定例庁内会議	R 5. 2. 1	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 3. 1	農試講堂	場員
現地委託試験設計検討会	R 4. 3. 23	ウェブ開催	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：鈴木 剛 (ほ場管理)、森 光治(施設等整備)

委員：大西志全、池谷 聡、伊藤幸雄、藤田涼平、飯田憲司、酒井 治、小倉玲奈、
田中一生、松島英明

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：令和4年4月22日

1) 場内持ち込みサンプルについて

2) 土壌分析結果報告

3) ジャガイモシストセンチュウの場内土壌検診

4) 防風林整備関係

その他) 8線道路及び馬鈴しょ調査室周辺等の泥濘化対策整備

第2回：令和5年1月10日

1) 令和5年度備品要望順位決定

第3回：令和5年1月30日

- 1) 令和5年度備品要望順位決定（通常枠の2件追加）
- 2) 施設整備要望

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：鈴木剛

委員：伊藤幸雄、其田達也、田澤暁子、品田博史、高畠聡史、木場稔信、佐々木太陽

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和3年4月7日

- 1) 業務委員会開催要領
- 2) 麦類畑作G（管理）業務体制
- 3) 室外契約職員体制
- 4) 室外契約職員のけが等の災害対応
- 5) 週間作業予定
- 6) 月間作業予定
- 7) 作付計画
- 8) 今後の作業予定
など

② 定例委員会：4月14日から10月27日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1) 機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2) 室外契約職員週間作業計画

③ 第1回臨時委員会：令和4年8月31日

- 1) 災害事故休暇に伴う室外契約職員の減員に対する作業等の調整

第2回臨時委員会：令和4年12月20日

- 1) 令和4年度室外契約職員雇用実績等
- 2) 令和5年度室外契約職員雇用計画（案）等
- 3) 機械契約職員雇用計画（案）について
- 4) 室外契約職員、機械契約職員雇用までのスケジュールと分担（案）

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：宗形 信也

委員：大黒剣太、木場稔信、足利和紀、斉藤涼介（図書連絡委員兼務）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和4年4月26日

- 1) 図書連絡委員の選任
- 2) 令和4年度定期刊行物購入計画の確認
- 3) 今年度業務内容の確認
- 4) その他（資料保管庫の利用、道総研OPACの運用開始）

② 第2回委員会：令和4年11月10日（電子メール）

- 1) 令和5年度定期刊行物購入計画の策定

③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：柳田大介

委員：松島英明、佐藤優美、和崎俊文、小野寺鶴将

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和4年9月26日

1) 情報セキュリティポリシーに関する説明会報告

2) 研究者情報データベースresearchmapの場内研究員登録状況

② 第2回委員会：令和5年2月28日

1) 北海道立総合研究機構情報セキュリティ対策基準

2) 各種ソフトライセンス証の取扱

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：宗形 信也

委員：松島英明、鈴木剛、池谷美奈子、宗形信也（兼任）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和4年4月25日

1) 本年度の委員

2) 令和3年度報告

3) 令和4年度活動計画

4) その他

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：荒木和哉

気象担当：荒木和哉

とりまとめ：高畠聡史

委員：木内 均、林 和希、飯田憲司、田澤暁子、和崎俊文、池谷 聡

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和4年4月14日

1) 定期作況調査報告実施体制

2) 定期作況調査報告実施要領

3) 年間日程

4) 具体的作業日程と該当作物

5) 最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局：森 光治、宗形信也

委員：佐藤優美、池谷聡、柴田匠、藤田涼平、足利和紀、池谷美奈子、桑原萌、田中一生、松島英明

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和4年4月25日

農業研究本部における公開デーは中止とする旨の指示のため中止

8) オホーツク農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：柳田大介

事務局：森光治、荒木和哉、鈴木剛、宗形信也

実行委員：林和希、池谷聡、飯田憲司、田中一生、藤田賢司

(2) 活動内容

① 第1回実行委員会：令和4年8月25日

1) 開催時期、方法等の確認

② 第2回実行委員会：令和5年1月12日

1) web開催時のスケジュール・担当確認

2) 発表課題成績の選定

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
飼料作物の育種に関する試験成績書	R5.3	75	30

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名称	開催日	場所	内容	参加者
			新型コロナウイルス対策のため 開催実績なし	

2) マスコミ、広報誌等による報道

タイトル	報道機関	掲載・放送日
該当なし		

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北見農試公開デー2022

新型コロナウイルス対策のため開催中止

5 見学受入れ

年月日	団体名	人数
	新型コロナウイルス対策のため受け入れ中止	

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研 修 項 目	団 体・人数	研修期間	対応グループ
令和4年度普及指導員研修(高度専門技術研修(植物保護))・前期	上川農業改良普及センター名寄支所(1名) 胆振農業改良普及センター(1名)	R4. 6. 6 ～6. 10	生産技術G 技術普及室

2 講師派遣

研修会および講習会	主 催 者	開催日	演 題	派遣者
令和4年(農)伏古生産組合酒造好適米の生産に係る研修会	(農)伏古生産組合	R4. 4. 15	北海道の酒米における胴割れ粒発生の要因解析と対策	田中一生
小清水町豆類耕作組合青空講習会	網走農改清里支所	R4. 7. 12	オホーツク向け大豆品種の育成と「とよまどか」の特性	田澤暁子
J Aたいせつ中長期的な酒造好適米生産に向けた研修会	J Aたいせつ	R4. 7. 21	北海道における水稻の高温障害について-胴割れ粒発生対策を中心として-	田中一生
令和4年度拓殖大学北海道短期大学「日本酒学」の講義	拓殖大学北海道短期大学	R4. 10. 14	北海道における酒造好適米(酒米)の品種改良と今後の課題	田中一生
清里町馬鈴しょ採種組合連合会50周年記念式典講演会	清里町馬鈴しょ採種組合連合会	R4. 12. 6	ジャガイモシストセンチュウ類の防除について	小野寺鶴将
菜豆栽培講習会	網走農改美幌支所	R4. 12. 19	菜豆(金時)の新品種と防除について	田澤暁子
オホーツクGAP研修会	オホーツク地域GAP導入推進会議	R5. 1. 30	GAP認証取得支援とGAP導入による農場改善事例について	小山拓也
だいこんのヒメダイコンバエに係る講習会	J Aしべちゃ	R5. 2. 1	ヒメダイコンバエの生態と防除対策について	小倉玲奈
豆作り講習会(オホーツク)	日本豆類協会	R5. 2. 7	豆類の新品種と栽培法	田澤暁子
高品質てん菜作り講習会	北海道農産協会	R5. 2. 10 -3. 10	近年のてんさい品種の動向について	池谷 聡
第29回馬鈴しょ及びでん粉講習会	公益社団法人 北海道農産基金協会	R5. 2. 24	インファロー散布を活用したばれいしょ害虫の防除法	佐々木太陽
良質小麦安定生産技術講習会	北見地区米麦改良協会	R5. 2. 24	良質小麦安定生産に向けて小麦の病害虫対策について	上堀孝之 小山拓也
道産小麦新品種(北見95号)勉強会・試食会	北海道農政部食品政策課	R5. 3. 13	北見95号の品種開発について	大西志全
特産種苗センター技術交換会	網走特産種苗センター	R5. 3. 14	コムギ縞萎縮病の発生と耐病性品種の育種状況 今年度発生が多かった病害虫	上堀孝之 小山拓也
J Aめまんべつ水稻部会研修会	J Aめまんべつ	R5. 3. 17	北海道の水稻における胴割れ粒発生の品種間差異と対策	田中一生

3 職員研修

氏 名	研 修 項 目	場 所	期 間
斉藤涼介	新任職員研修A	道総研プラザ	R4. 4. 11～R4. 4. 13
三輪優吾	新任職員研修A	道総研プラザ	R4. 4. 11～R4. 4. 13
柴田 匠	新任職員研修A	道総研プラザ	R4. 4. 11～R4. 4. 12
赤松栄一	刈払機取扱作業安全衛生教育	オホーツク木のプラザ	R4. 4. 27
柴田 匠	車両系建設機械運転技能講習	(株)技術能力開発センター北見 見教習所	R4. 5. 27～R4. 5. 28
柴田 匠	クレーン等の業務に係る特別教育	(株)技術能力開発センター北見 見教習所	R4. 6. 16～R4. 6. 17
斉藤涼介 三輪優吾 中出秀信	新規採用職員研修（研修B・重要課題研修） 特定化学物質及び四アルキル鉛等 作業主任者技能講習	オンライン開催 訓子府町公民館	R4. 6. 21～ 全9回 R4. 6. 29～R4. 6. 30
横川愁斗	危険物取扱者試験準備講習	北見芸術文化ホール	R4. 9. 27～R4. 9. 28
柴田 匠	振動工具取扱作業安全衛生教育	(株)技術能力開発センター北見 見教習所	R4. 9. 8
柴田 匠	農業機械研修（トラクター基本操作）	北海道農業大学校	R4. 10. 13～R4. 10. 15
柴田 匠	自由研削といしの特別教育	(株)技術能力開発センター北見 見教習所	R4. 11. 9
高畠聡史	刈払機取扱作業安全衛生教育	(株)技術能力開発センター北見 見教習所	R4. 11. 16
柴田 匠	アーク溶接特別教育	北見工業技術センター	R5. 2. 15～R5. 2. 17
柴田 匠	伐木等業務安全衛生特別教育	オホーツク木のプラザ	R5. 3. 1～R5. 3. 3
伊藤幸生他2名	粉じん作業特別教育	オンライン	R5. 3. 3
足利和紀	刈払機取扱作業安全衛生教育	オホーツク木のプラザ	R5. 3. 16
小野寺鶴将	日本応用動物昆虫学会大会 ¹⁾	大阪府	R5. 3. 13～R5. 3. 15
佐々木太陽	日本応用動物昆虫学会大会 ¹⁾	大阪府	R5. 3. 13～R5. 3. 15
小野寺鶴将	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	札幌市	R5. 2. 21～R5. 2. 22
佐々木太陽	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	札幌市	R5. 2. 21～R5. 2. 22
小倉玲奈	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	札幌市	R5. 2. 21～R5. 2. 22
田中一生	日本作物学会第255回講演会 ¹⁾	日本農工大学農学部	R5. 3. 29～R5. 3. 30

1) 専門研修Ⅱ

4 職場研修

研修会および講習会	講 師	開 催 日
ハラスメントについて	総務課長 森光治	R4. 6. 2
交通安全について	総務課長 森光治	〃
一般事業主行動計画について	総務課長 森光治	〃
農作業安全について	研究主幹 鈴木剛	〃
病虫害汚染防止について	研究部長 岩崎暁生	〃
パートタイム職員さんに仕事をして もらうにあたって	研究部長 岩崎暁生	〃

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期 間
該当無し			

Ⅶ そ の 他

1 技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取り組みはなかった。

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームで取り組んだ課題はなかった。

オホーツク管内の各関係機関より令和4年度地域課題・農業試験研究課題ニーズとして2件の要望があった。要望の具体的内容把握のため、それぞれ現地聞き取り調査を実施した。

現地聞き取り調査： 8/24 滝上町役場

8/ 8 網走農業改良普及センター清里支所

10/ 4 網走農業改良普及センター清里支所（JAしれとこ斜里、JA清里町、JA小清水、
網走農業改良普及センター清里支所、ホクレン北見支所営農支援室）

12/14 網走農業改良普及センター清里支所

3 表彰・受賞

(1) 令和4年北農賞（第83回）（令和4年12月16日）

品種：「チモシー」「なつさかり」「なつちから」「なつぴりか」

玉置宏之・佐藤公一・吉澤 晃・藤井弘毅・足利和紀・下小路英男・鳥越昌隆・田中常喜・古谷政道・
中住晴彦・川村公一・大塚博志・嶋田 徹・岩渕 慶・澤田嘉昭

4 行事

月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 1日	辞令交付式(新規採用)	25日	てん菜輸入品種検定試験等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会
11日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会 (欠席)	12月 1日	北見農試現地委託試験成績検討会 (Web併用)
21日	(Web開催)第1回本部長会議	12月6-7日	飼料作物品種比較試験成績検討会
5月 9日	(Web開催)第1回農研本部場長会議	8日	場内成績検討会議
25日	(Web開催)第2回本部長会議	14日	(Web開催)第2回研究部長会議
6月 2日	職場研修(ほ場汚染防止・労働安全等)	14日	北見工大社会連携推進センター創立30周年記念式典
9日	第2回農研本部場長会議	15日	(Web開催)第6回安全推進・情報連絡会議
13日	場内見学案内リハーサル	16日	第83回北農賞表彰状等授与式
13日	(web開催)北見農試施設整備検討会	1月 4日	仕事始め
15日	場内新規課題検討会議	11日	訓子府町新年交礼会
16日	(Web開催)第1回安全推進・情報連絡会議	16-20日	(Web開催)北海道農業試験会議成績会議
21日	(Web開催)第1回研究部長会議	19日	(Web開催)第5回農研本部場長会議
24日	(Web開催)全国農業関係場所長会議	19日	(Web開催)第7回安全推進・情報連絡会議
30日	新規課題検討会議(畜産部会)	2月 13日	オホーツク地域農業技術支援会議・五者会議
-7月1日		15日	(書面開催)NATEC定期総会・(web開催)研究交流会
7月 4-6日	新規課題検討会議	16-17日	場内設計検討会議
7日	(web開催)北見農試施設整備検討会	16日	(Web開催)農業新技術発表会(全道版)
22日	(Web開催)第2回安全推進・情報連絡会議	16日	(Web開催)第8回安全推進・情報連絡会議
27日	(web開催)北見農試施設整備検討会	21日	(Web開催)設計会議 てん菜分科会
29日	第9回訓子府まちづくり推進会議	24日	(web公開)オホーツク農業新技術セミナー(2.24-3.24)
8月 8日	(Web開催)第1回オホーツク地域農業気象連絡協議会	3月 1日	(Web開催)穂発芽研究会
29日	北海道農業試験会議(秋まき小麦設計会議)	6-10日	(Web開催)北海道農業試験会議設計会議
9月 7日	(Web開催)第3回安全推進・情報連絡会議	6日	(Web開催)第2回オホーツク地域農業気象連絡協議会(欠席)
26日	(Web開催)第3回農研本部場長会議	15日	(Web開催)北海道農業試験研究推進会議本会議
10月 14日	(web開催)北見農試施設整備検討会	16日	(Web開催)第9回安全推進・情報連絡会議
21日	(Web開催)第4回安全推進・情報連絡会議	20日	第6回農研本部場長会議
24日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会	22日	(web開催)北見農試施設整備検討会
31日	作況報告会	22日	第10回訓子府まちづくり推進会議
11月 7日	第4回農研本部場長会議	23日	(Web併用)北見農試現地委託試験設計検討会
16日	防火訓練	31日	辞令交付式(退職・異動)
17日	(Web開催)第5回安全推進・情報連絡会議		
20日	道産小麦品質向上プロジェクト試験成績検討会		
22日	北見工大社会連携推進センター産学官連携推進員・協力員合同会議(欠席)		
24日	馬鈴しょ輸入品種等選定試験及び育成系統連絡試験成績検討会		

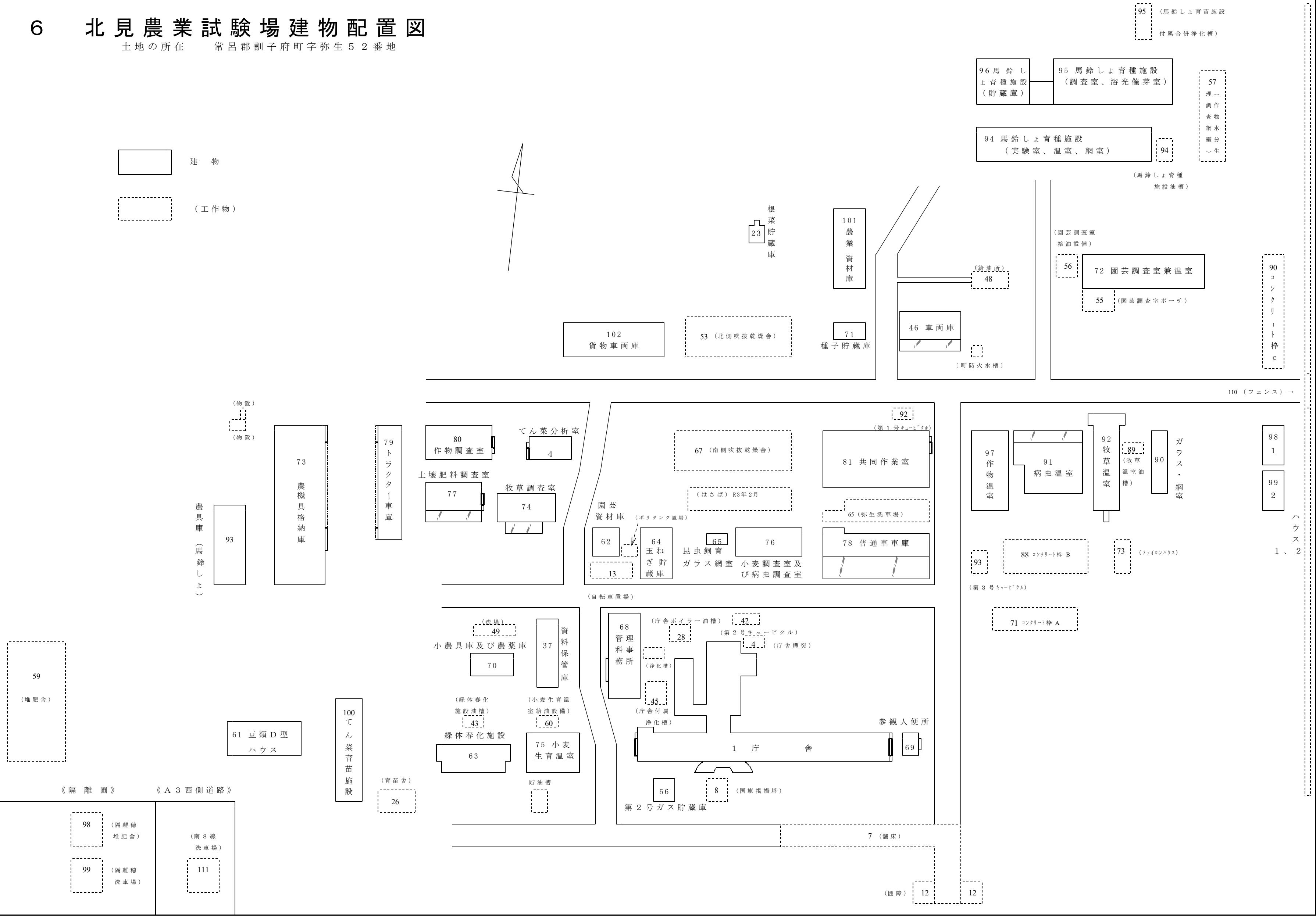
5 自己点検への対応

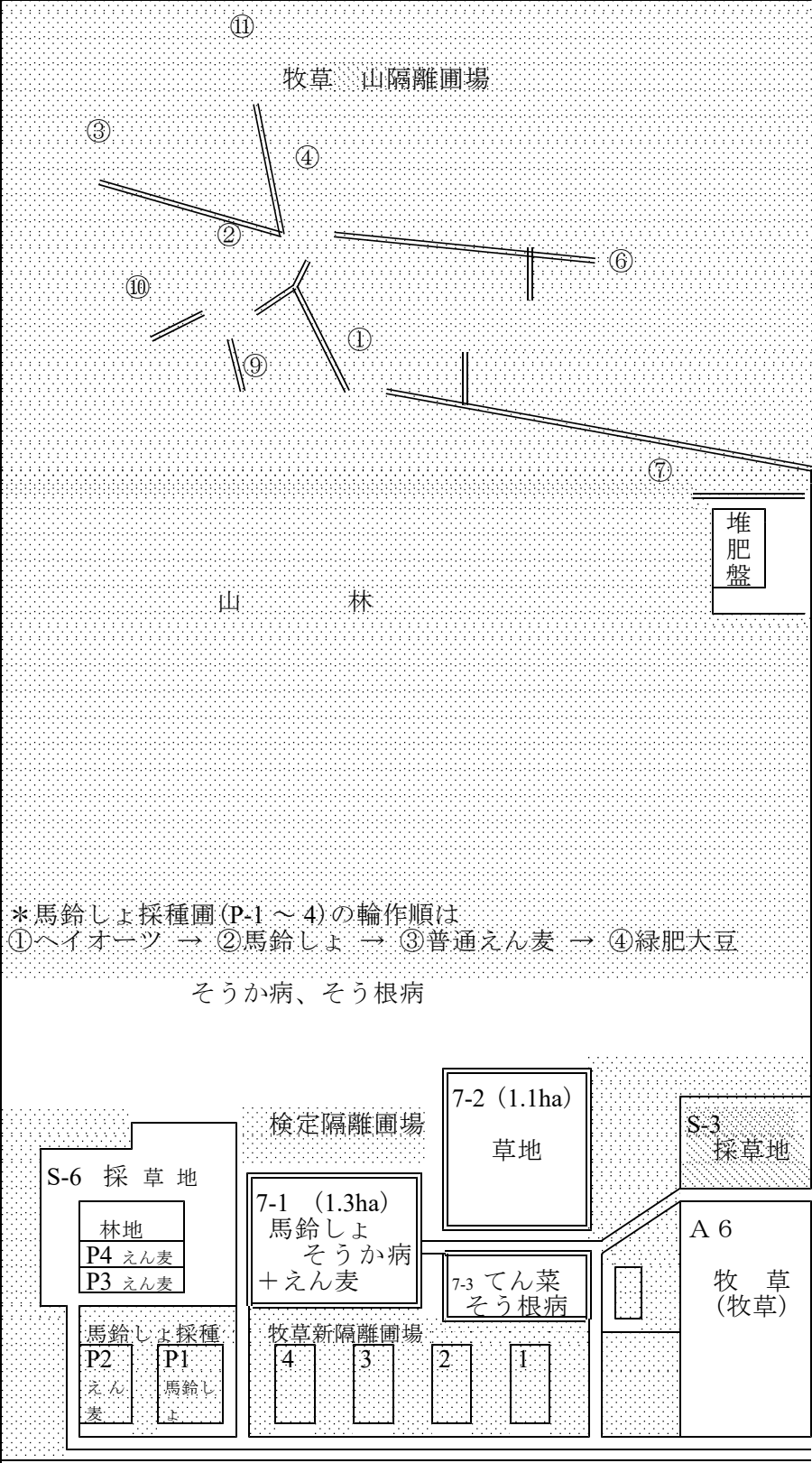
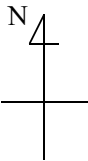
事 項	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
研究成果発表会の開催件数	2	0	2	1	1	3	2	1(web)	1(web)	1(web)
研究成果発表会への延べ参加人数	247	0	496	169	136	673	325	938(視聴)	492(視聴)	514(視聴)
研究会等の開催件数	4	0	0	1	1	1	0	0	0	0
研究会等への延べ参加人数	650	0	0	39	97	60	0	—	—	—
発表会・展示会等への出展件数	1	0	2	1	2	3	0	1	2	2
研究報告書の発行状況	6	4	4	2	4	—	3	0	0	0
技術資料の発行状況	1	1	1	4	1	—	2	2	0	0
学会やシンポジウム等での発表件数	47	24	36	33	20	25	24	10	17	11
学術誌や専門誌への投稿論文数	18	17	10	16	11	9	9	5	7	5
普及組織との連絡会議等開催件数	40	59	9	9	10	5	3	4	5	2
技術相談件数	88	43	66	85	89	85	76	84	94	99
技術指導件数	175	148	78	56	55	53	59	55	33	33
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	32	16	15	31	30	17	20	22	15	15
研究成果の公表・活用状況(書籍)	1	6	1	2	2	1	3	9	5	4
研究成果の公表・活用状況(新聞)	4	8	2	7	3	5	3	8	2	4
技術審査件数	2	1	1	1	0	1	0	0	0	0
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	182	48	94	180	115	145	55	—	—	—
研修会・講習会等の開催件数	2	14	0	2	2	3	1	1	0	0
研修会・講習会等の延べ参加者数	11+?	1,200	0	520	308	40	100	27	0	0
研修者の延べ受入人数	16	10	2	0	0	28	8	2	0	0
特許等の出願件数	1	0	0	1	1	3	2	2	0	0
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
視察者・見学者の受入件数	61	33	26	37	38	25	35	0	0	0
視察者・見学者の延べ人数	855	512	371	603	648	359	575	—	—	—
学会等役員・委員等件数	11	12	14	17	9	12	9	12	6	6
国際協力事業等への協力件数	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	21	25	37	28	20	6	10	0	0	0
市町村との意見交換等の開催件数	13	3	16	5	8	2	0	0	0	0
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	7	6	6	3	4	8	6	0	0	10
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
企業等への訪問件数	35	20	18	22	18	29	38	2	3	0
関係団体等との意見交換等の開催件数	29	25	38	24	29	43	9	3	2	0

6 北見農業試験場建物配置図

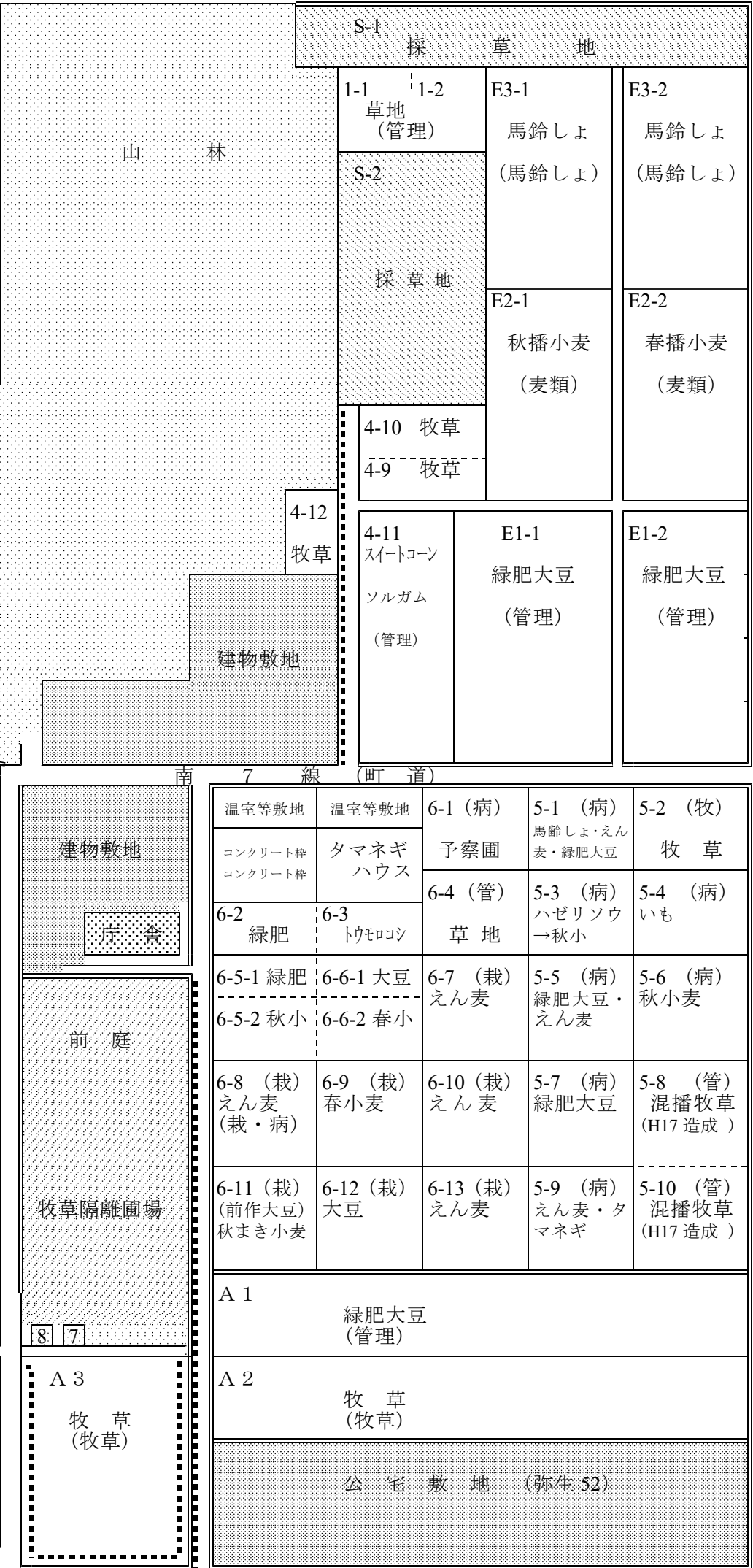
土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地

建 物
(工 作 物)





*馬鈴しょ採種圃(P-1 ～ 4)の輪作順は
①ヘイオーツ → ②馬鈴しょ → ③普通えん麦 → ④緑肥大豆
そうか病、そう根病



S-1 採草地			
1-1 草地 (管理)	1-2	E3-1 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	E3-2 馬鈴しょ (馬鈴しょ)
S-2		E2-1 秋播小麦 (麦類)	E2-2 春播小麦 (麦類)
4-10 牧草	4-9 牧草		
4-11 スイトコーン ソルガム (管理)	E1-1 緑肥大豆 (管理)	E1-2 緑肥大豆 (管理)	

温室等敷地 コンクリート枠 コンクリート枠	温室等敷地 タマネギ ハウス	6-1 (病) 予察圃	5-1 (病) 馬鈴しょ・えん 麦・緑肥大豆	5-2 (牧) 牧草
6-2 緑肥	6-3 トウモロコシ	6-4 (管) 草地	5-3 (病) ハゼリソウ →秋小	5-4 (病) いも
6-5-1 緑肥 6-5-2 秋小	6-6-1 大豆 6-6-2 春小	6-7 (栽) えん麦	5-5 (病) 緑肥大豆・ えん麦	5-6 (病) 秋小麦
6-8 (栽) えん麦 (栽・病)	6-9 (栽) 春小麦	6-10 (栽) えん麦	5-7 (病) 緑肥大豆	5-8 (管) 混播牧草 (H17 造成)
6-11 (栽) (前作大豆) 秋まき小麦	6-12 (栽) 大豆	6-13 (栽) えん麦	5-9 (病) えん麦・タ マネギ	5-10 (管) 混播牧草 (H17 造成)
A 1 緑肥大豆 (管理)				
A 2 牧草 (牧草)				
公宅敷地 (弥生 52)				

至置戸 南 8 線 (道) 正門 至北見

B 6-1 トウモロコシ (牧草) B6-2 草地 B6-3 牧草・えん麦 (牧草)	B 5 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	B 4 普通 えん麦 (管理)	B 3 てん菜 (畑作)	B 2 秋播小麦 (麦類)	B 1 秋播小麦 (麦類)
---	-----------------------	--------------------------	--------------------	---------------------	---------------------

C 6 緑肥 ひまわり (管理)	C 5 緑肥 ひまわり (管理)	C 4 野生 えん麦 (管理)	C 3 緑肥そば (管理)	C 2 緑肥そば (管理)	C 1 ソルガム 試作 (管理)
---------------------------	---------------------------	--------------------------	---------------------	---------------------	---------------------------

A 5 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローバー (H20 造成)	A 4 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローバー (H20 造成)	D 3 豆類 (畑作)	D 2 緑肥大豆 スマル R (管理)	D 1 春播小麦 (麦類)	林地 (沢) S-4 採草地
---	---	-------------------	------------------------------	---------------------	-------------------------



北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 令和4年度

令和5年8月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
